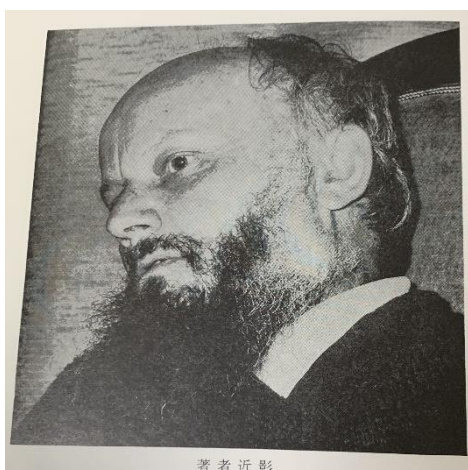
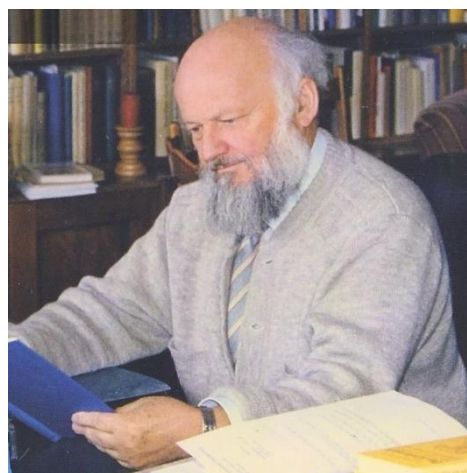


できるだけ本筋から脱線しないようにと願いつつ、最初に加藤常昭先生におうかが
5 いたいのは、説教学に付されたボーレン先生の写真の事です。少し怖いくらいな
のです。ドイツ語版の1993年の第6版というのを持っているのですが、これには写
真はありません。先生が訳された原書にはあったのか。また写真選定のエピソード
10 があるのでしょうか。後述の東神大読書会の中で言及がありました。加藤先生が撮
られた写真で、別の版では南ドイツのシュロース・ボーゲンで開かれた、80歳誕生
記念シンポジウムの時の両手を挙げているいかにもボーレン先生らしい写真。残念
ながらわたしの手元にはありませんが……



著者近影



R.ボーレン「神が美しくなるために」表紙



20 南ドイツ、スイス・バーゼルにも近い
シュロース・ボーゲン



(参照) C.ブルームハルト

東京神学大学での読書会から

25 加藤常昭先生。1961年実践神学教授平賀徳造先生がペンテコステの朝、紅葉坂教会牧師室で心筋梗塞で急逝。秋に後継者として招聘。東京神学大学学長命令で1964年にアメリカに1年、ドイツに1年の留学の予定であった。1964年の夏に加藤さゆり先生ががんの疑いで手術することになった。当時牛込払方町教会牧師で、教会の老婦人ががんの疑いを自分で抱いて、さゆり先生に検査同伴を求めたところ、顔色の悪いさゆり先生に異常が見つかった。教会員で厚生年金病院の外科部長をしておられた方が病院の帰りに常昭先生を訪ね、さゆり先生は十中八九胃がんであり、すぐに手術をしなければならない、先生のアメリカ行きは中止してもらいたいと告げ、すべての計画は中止に。さゆり先生はがんではなく、でも胃の1/3を切除。別の病院では異常はほとんどないではないですかと言われたぐらい大きな手術であった。

35 翌年、加藤先生はドイツに2年の予定で。夏にドイツ語研修。これにもいろいろおもしろい話がいろいろありますけど省略をします〔ぜひ、いくつか聞かせてください！ベルリンのゲーテ・インスティテュートに通われたことはうかがったことがあります、場所は変わっているかもしれませんが、わたしが渡独した最初の月のゲーテの研修旅行中に見つけ出して写真を撮った思い出があります〕（録音14分30秒）。行ったのはベルリン。ベルリン自由大学にヘルムート・ゴルヴィツァーがおられた。バーゼル大学のカール・バルトの後継者として一度選ばれた人。神学部は選んだが、バーゼル州の州議会が共産主義者をスイスに入れることはできないと拒否をした。ばかげた決議であった。加藤先生はまずゴルヴィツァー先生のところで勉強するつもりだった。聖餐論の著作があり、聖餐論の手引きをしてもらおうつもりだった。語学校に通いながら、ドイツ語がなめらかになってきたころに個人教授として週1回訪ねた。だいたいこれを読めと先生が本をくださり、それを1週間から2週間の間に読み終えなければならなかった。書かないまでも感想を言えるように用意をして、先生と話し合いをするということをした。

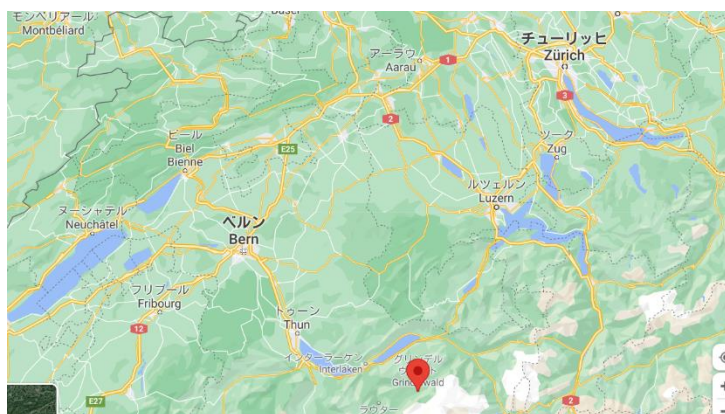
50 秋からの学期、冬学期をどうするのかねと。冬学期休暇を取る。南ドイツのフロイデンシュタットの別荘に行く。手紙が来たって返事しないほどに閉じこもって自分の研究をするので君と一緒にやるわけにはいかない。加藤先生がび

55 っくりして途方に暮れているとルドルフ・ボーレンというのを知っているかと。
ちょうど留学前に論文集 Predigt und Gemeinde「説教と教会」という論文の一部
60 部を読んで、たいへん感銘を受け、一度尋ねたいと思っていたと告げたところ。
一度尋ねるのではなくずっといたら。非常にすぐれた人だから僕が推薦すると
推薦状を書いてくださった。君も書けよと言われ、加藤先生も自分の考えを書
いた。ボーレン先生は誰だか良く分からなかったがクリストフ・ブルームハルト
や聖書釈義と説教についての論文をだいぶんエキサイトして読んだので、感
65 想を書いて、できることなら先生のところで学ばせてもらいたいと。

返事が返って来て、自分も Freisemester 研究学期だと。本を書くための時間
とする。freiwilliger Assistent 自分で申し出た、無給の助手として僕のところ
65 に来るかねと。本の著述を手伝うかと言われた。加藤先生がボーレン先生を
知らない以上に加藤先生を知らない。しかも9歳下の日本から来た神学者を主
著の著述の手伝いをさせるとはどういうことかと思
70 って、ずいぶん大胆な人だと思ったが、喜んでと返事を書いた。あとでボー
レン先生が笑った話だったが、ふっと思ってその手紙を書いたが、手紙を書
いて郵便ポストに入れた途端に、見も知らない日本人を助手に迎えるなんて
乱暴すぎる。お前は早とちりだと思って。その時はスイスのグリンデルヴァルト
75 の別荘におられた。



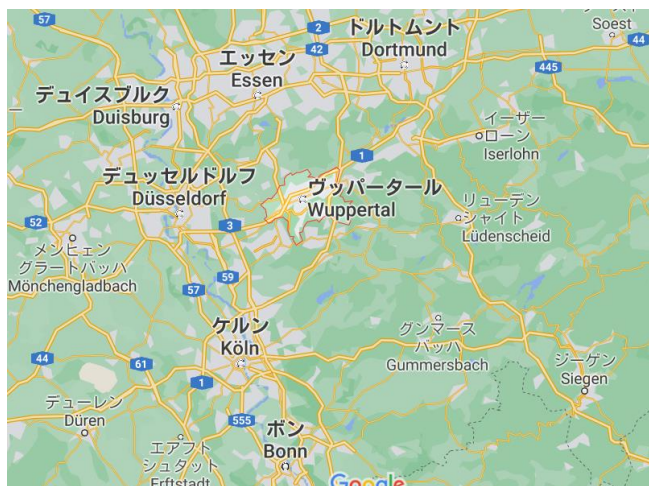
グリンデルヴァルトの郵便配達



スイス グリンデルヴァルト Grindelwald

草地の真ん中に立っているポストを、これがそうだよと後で教えてくださった。
75 その下に座っておられたそう。郵便局の人が郵便を集めに来た時に取り返そう

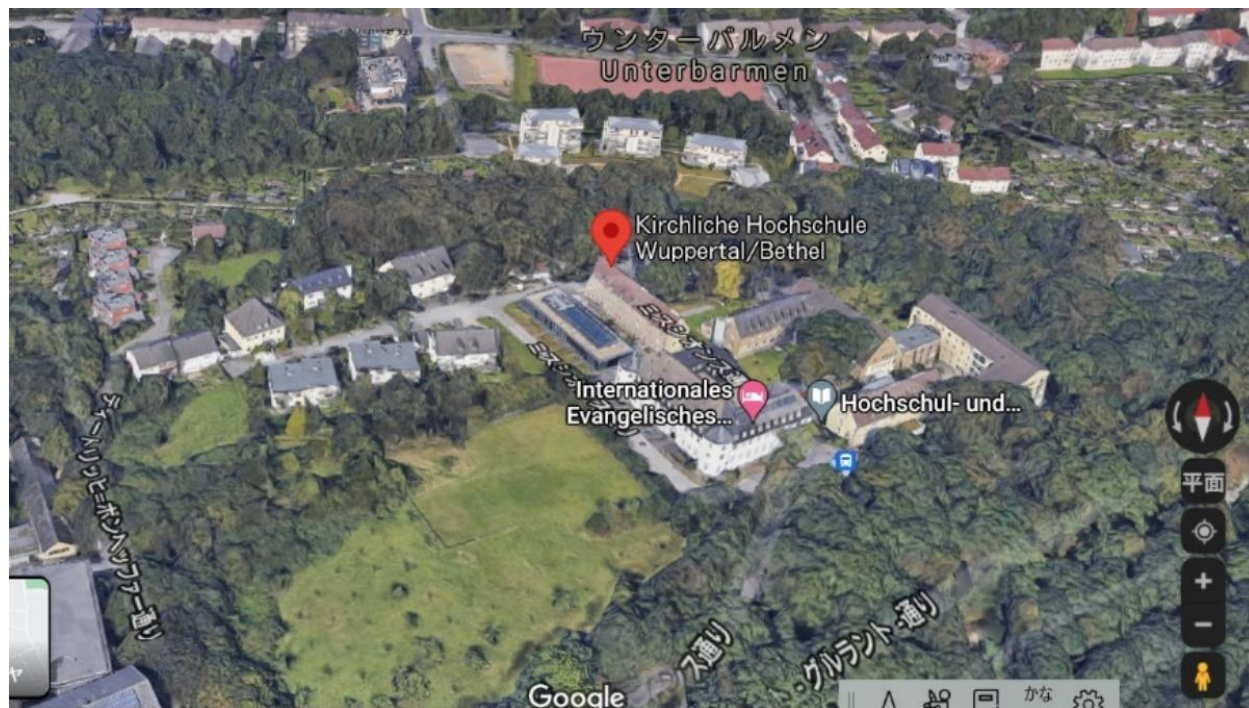
と思われた。でも待てど暮らせど来ないのであきらめて帰った。きわどいところで加藤先生に手紙が届いちゃった。よくわたしを迎える気になりましてねと言ったら、だって君の手紙はラブレターだろうと。ラブレターのような熱烈な手紙で、ゴルヴィツァー先生の推薦状もとても良いもので、好意あふれるものであった。そうせざるを得なかった。すべて神の導きとはこういうふうにかかるものだなと。そして秋にヴッパータールという神学大学の構内に住んでおられる先生のお宅を訪ねた。



ヴッパータール Wuppertal の町と
有名な懸垂式モノレール
Schwebebahn



現在は神学センター内のヴッパータール／ベーテル神学大学
Kirchliche Hochschule Wuppertal



95 ヴッパータール神学大学は戦争中ナチに抵抗した告白教会の改革派の立場に
立つている人たちが神学校と名乗るとナチに許可されないので、宣教師養成学
校の中に神学校の一部として作っちゃった。あまり無茶苦茶な弾圧ができな
100 かったために、改革派の一種の地下の神学校として存立した。それが後に神学
大学として、おもしろいことに告白教会がつくった神学校は5つ（西ドイツ3
つ、東ドイツ2つ。東ドイツ政府になってから公認されず、西ドイツはベルリ
ンとバイエルンのノイエンドテルズアウ [私事ですが、わたしが過ごした大学
です!]、そしてヴッパータール）あるが、ヴッパータールの神学大学の特色は
イギリスのカレッジと同じシステムで全寮制で、例外的に健康的な理由で通学
105 生も認められていたが、学生はみんな量に入る。大学の教授もほとんどが同じ
キャンパス。山の上で聖なる山と呼ばれていた。別の名前があるけどついに覚
えなかった [ローLoh／ウンターバルメン／ヴッパータール……丘の名前はわ
かりませんでした]。土曜、日曜以外はアルコールも山を登ることは許されな
いところだと。実際、学生自身も土曜日曜以外はアルコールを飲まない。非常
に良く勉強する学生たちの集まりだった。そこでボーレン先生は実践神学の教
授をしておられた。ついでに言いますとドイツの学生たちは良く勉強します。
110 私も学生寮のゲストルームを一部屋もらって生活した。学生たちと仲良く過ご
した。土曜から日曜にかけてはサッカーしたり良く遊んだけど学生たちはとっ
ても良く勉強した。わたしが行った時は東京神学大学の学生は負けていると思
った。興味深かったのは授業の予習をする。きちんと言われたことはやって来
るし、とっても感心した。

115 そこでやった作業は、ボーレン先生がだいぶ書き上げた原稿をもらってきて、
それを読んで、感想を書いて、そして討論。加藤先生が討論で勝つと、ボーレ
ン先生が書き直す。その中でおもしろいのは、中身は同じだが、章の表題がか
わっているのがある [たとえば? 例を教えてくださいと思います]。その
いくつかは加藤先生に責任があり、この章の題はくだらんと。助手のデンマー
120 さんが、ちょっと興奮してある時言ったことだが、ドイツ語で geschmacklos
[1. 悪趣味な、無風流な。2. 風味のない、まずい.]、日本語で言うと「趣
味がない」、「下品」という意味でもあるので、大学教授に Geschmacklos なん
て言った人ありませんよと後で言われた。ずいぶん失礼な対立があったけれど

も、ボーレン先生はちゃんとその表題を変えられた。そのように人の意見を聞いて、受け入れたら書き換える。日本の教授でそんな人たぶんいないんじゃないかなと思われた。おもしろいのはボーレン先生が後で、その1月のことを思い出すときに、自分が負けたことの記憶がない。いつも自分が勝ったと思っている。少なくとも勝ったと言って見せてる。君はいつも冷や汗かいてたねということ言われた。あれ冬だったよ。でもいつも汗びっしょりで帰ったよね、と。先生も負けたはずですよと言ったら、いやそんなはずはない、と。(録音26分)

でもとっても激しい時もあった〔このエピソードは何度か説教セミナーで聞かせていただきました〕。とっても激しい時。不機嫌になられた。討論が2時間から3時間続く。ドイツ語をしゃべり続ける。聞き続ける。もうこれでおしまいと言っても先生はあいさつをしない。さよならと言って握手しようとする手を手を後ろに回す。黙って。デンマーさんが時々言ったことは、今日も戦場Schlachtfeldでしたね。どっちが勝ったと言ったら、それは言わない方が良いでしょう。そしてそのまま帰る。ある時などは、2、3度あったけど、加藤先生も言い過ぎたかなと思って、先生は返事もしない、不機嫌で、もうヴッパータールにいられないかなと思って、学期の途中だけどどこか別に変わらないといけない、どうしよっかなと思ったことがある。そしたら真冬の夜中12時頃、加藤先生の部屋をこつこつとたたく人がいて、出て見たら、こつこつとたたくので、Wer ist da? 誰と尋ねたら「ボーレン」と言って返事なされた。姿をあらわして「加藤君、散歩しようよ」と。真冬、零下10度、15度。キャンパスの隣が宗教教育専門の教育大学で、その向こうが大きな公園。その公園を歩く。皓皓たる月が輝いている。黙って歩いている途中でひゅっと立ちどまって、「加藤君、今日は僕が悪かった。続けてやってくれるかね」と言われた。わたしから謝った経験は一度もないけれども、そういうことが二度も三度もあった。その経験の報告をさゆり先生に書いたら、すぐに手紙が来て「あなたはドイツでも日本と同じことをやってる」。さゆり先生に言わせれば「あなたは何でも思ったことをはっきり言う。そして人を怒らせる。ドイツでもそんなことをやっているのか。少し慎んだらどうか」と言って来た。昼間にしょっちゅう散歩に行く。その散歩の途中でさゆり先生の手紙を持って来て、歩きながらド

155 イツ語に訳して聞かせた。ひょいとわたしの顔を見て、「君の奥さんはえらいね、かしこいね。だけど学問てのは何だか知らない人だね。〇〇にはそういうのがいる」。学問は率直で思ったことを言うもの。だから自分は学問をやっているんだから心配しないでいなさいと言われた。いろいろな人に読ませて、何度も書き直して書き上げたものが「説教学」。

160 3頁 日本版への序

2行目以下

日本で説教する方たちのためにわたしが願うのは、この『説教学』が、
新しい勇気と、新しい喜びを、与える助けになれば、ということである。
神についての沈黙が日本において破られるならば、それは日本語でなされることと
165 思うのである。

*****（東神大読書会の録音31分から）

これにはずいぶんいろんな意味が含まれている。著述を手伝うことになった時にいろいろおもしろいことがあった。当時の学長ハンス・ゲオルク・ガイアーという組織神学の人、哲学を良く学んだ人で、後にフランクフルトに移られた方と、ある時トイレでとなりあった。ボーレンさんの説教学を手伝っているんですね。日本に帰ったらそれを翻訳するそうですね。そうですね。そんなばかなことおよしなさいよ。ドイツ語の本を翻訳するよりも自分で書いたら良いじゃないかと。[このエピソードは「説教論」ではサッカー試合後のシャワー室で
175 の話に……] わたしはそれはそうだと。日本語で説教学を書きたいと思っていたけど、ボーレンさんにつきあって、その気がなくなったと。当分自分で書くのはしんどいなと思っていると言いましたら、それはなぜかって言うので、ゆっくり話しましょ、うちにいらっしゃいと言うので。翌々日かガイヤーさんのおうちに行って、お茶をいただきながらえんえんと日本における説教学の課題
180 を語った。

ここでボーレンさんが「日本語でなされるべきだ」って言うのは、ちゃんと日本語の説教学が生まれると良いと、それから日本語の説教がきちんと行われる

185 ようになると良いと。そういう思いがある。「神についての沈黙」という言葉
は、これは後で読むとわかると思いますけども、説教学の基本的な課題だと思
っているわけで、神について語られていないと。言い換えると、神の言葉が語
られていないと言っても良いわけですけども。説教の言葉を失っちゃっている
んじゃないか。それがドイツの現実だと。でもわたくしはいろんな討論に続い
て、同じ状況が日本でも起こっているって話しをしたものですから、その神に
190 ついての沈黙が日本でも破られて欲しい。そのためには日本語で説教学ができ
ないとだめですよ。そういうわたし自身とふれあっていて、日本人の中に
あるためらいを感じずるものだから、日本でも説教、あるいは説教学をめぐって、
新しい勇気と喜びが必要だと。そのための助けになれば良いんだ。それを言い
換えると説教学を訳したからって言って日本での問題が解決するわけではない。
195 自分はそこまではやれないので、あなたがたがやるべきだと。その助けに
なれば良いのだがという思いですね。これはボーレンさん、日本をずっと愛し
てくださいましたけれども、その姿勢がここに良く現れていると思うんです。
〔録音 36 分〕

200 5 行目以下

教會的に、また神学的に努力が更に続けられ、ここに明らかになってきているのは、
聖霊論的な手がかりから思索することが、いかに実り豊かなものかということである。
説教にたずさわっている者は、神学の全体にたずさわっているのである。神学は—
—まことに多様なものであるにもかかわらず、——世界のいずこにおいてもただひ
205 とつのものである。

***** (録音 36 分 20 秒)

この 4 行にもいろんな問題についての言及がなされているわけです。ここでま
ず興味があるのは「教會的に」というふうにちゃんと言っていることですね。
210 「神学的に」とだけ言っていないで「教會的に」努力が続けられている。そう
いう過程で「明らかに」なったのは、「聖霊論的な手がかりから思索すること」。
この説教学のひとつの大きな意味は「聖霊論」ということを明らかにしたこと
です。「聖霊論」については後で勉強することになりますけども、ボーレン教授

の神学的な立場は明らかに聖霊論的と言って良い。

215 このボーレンさんの「説教学」はドイツの説教学の中で非常に大きな働きを
しました。残念ながら日本語と韓国語には訳されていますけれども英語には訳
されてはおりません。これはわたくしは英国やアメリカの説教学にとっては致
命的なことだと思っています。ドイツの説教学の歴史の中で、ボーレンさんの
220 「説教学」が持っている意味は、一つには「神の言葉の神学」から生まれた説
教学だということ。神の言葉〔の神学〕から生まれた説教学というのは、他に
もないわけではないですが、これだけ大きな説教学としてまとまったのはこれ
だけです。しかも「神の言葉の神学」というのはカール・バルトの戦いからは
じまったことは明らかで、もちろん「神の言葉の神学」っていうのは、バルト
と対立したエーミール・ブルンナー、場合によってはブルトマンを含めて、大
225 きな概念としても考えられていますけれども、もうひとつはバルト神学とも
「神の言葉の神学」とも言いかえられるわけで。ボーレンさんはバルトの弟子で
もあるわけですね。そのバルトとボーレンさんとのかかわりについては、今、
ここでは、非常におもしろいことがたくさんありますけども、えんえんと語っ
ているいとまはないわけですが〔何か、今回ご紹介いただけるでしょうか?〕、
230 ひとつははっきり言えることは、その中でただ一つバルトを継承したんじゃなく
て、バルト批判を試みた。それは良く言われるバルトにおけるキリスト論集中
ということです。キリスト論的集中というふうに訳す人もいますけども。わた
しはキリスト論集中と訳すのが正しいと思っています。わたしがボーレンさん
と討論に入った時に、ひとつの大きなテーマはバルトをどう理解するかってい
235 うことで。ボーレンさんは後でていねいに見ますけれども、オランダの改革派
の神学などの助けを借りながら、バルトのキリスト論集中をずいぶん批判する
ので、わたくしは、それは一方的なバルト理解だと言って、バルトに代わって
相手をしていけるなんていうほどではないんですけども、わたしのバルト理解
を話しをしました。そういう中でわたくしも、なぜボーレンさんが聖霊論とい
240 うことを大事にするかだんだんわかってきました。この「聖霊論的な手がかり」
からのものを考えるということがどれだけ大事かという、この言い方はおもし
ろいので。手がかりを聖霊論が与える。ものを考える時の出発点になる。ここ
は、こういうふうに考えれば良いんじゃないかという手がかりを聖霊論が与え

てくれる。そうすると実り豊かになる。特にボーレンさんの考え方は実践神学
245 っていうのは聖霊論的に考えないと実り豊かにならないと。そういうことです。

〔録音 40 分 30 秒〕

とてもおもしろいことに、わたしがボーレンさんときあいはじめた最初の
頃には、ボーレンさんがあまりにも聖霊論っていうものですから、わたくしも
頑固なところがありまして、そういうのならこっちもキリスト論で戦って見せ
250 るっていうところもあったんですけども、考えて見ますと、ずいぶん聖霊論
的になっちゃったなど。時々思うのは聖霊論のマッサージを受けたっていう感
じがする。確かにキリスト論のひとつの理解をすると筋肉がかたくなりますね。
それを聖霊論ですとマッサージしてくれますね。マッサージすると何が良くな
るかって言うと血のめぐりが良くなると言っても良いだろうと思います。神学
255 の血のめぐりって変な言い方ですけども、血のめぐりの良い神学と、血のめぐ
りの悪い神学っていうのがあるわけで……

その次のセンテンスも大事で。「説教にたずさわっている者は、神学の全体
にたずさわっているのである。」これは非常に重要な発言なんですね。「神学の
260 全体に」っていうことは、あの、こういうふうにも考えても良いわけで、みなさ
さんが神学大学で勉強していることは二つのことで、一つは特に、大学院に入
ると自分の専門が決まって来ますね。で、そういうことから言うっていうと、こ
の博士課程前期課程が終わったところで、これから後、皆さんが良く聞かれる
のは、あなたは論文何書いたって言われる。そうすると歴史神学で書きました。
265 聖書神学で書きました。あるいは旧約で書きました。これは一種の専門。しか
し同時に牧師っていうのは神学全体を知っていないといけないわけです。これ
はとっても大事なことです。神学の一部だけをかじっては牧師になれません。
伝道者になれない。だからどの学科も真剣に聞かなきゃいけないし、きちんと
270 マスターしていかなくちゃいけないわけです。そういうところでですね、みなさ
さんが学んで行く時に、履修要目なんかに出て来るように、神学教育って何を教
えるのかってことが全体が見渡されるわけです。聖書神学だ、歴史神学だ、組
織神学だ、実践神学だと加わるわけです。しばしば実践神学——実践神学の中
核は説教だと思うんですけど——説教っていうのは神学の中の一部と

275 いうふうに考えられるわけです。だけどボーレンさんは説教学ってというのは、
あるいはここでもっと正確に言うと言教をしている人間は神学の全体をやっ
ています。だから東神大を出て説教する時には東神大で教えらえる全学科につい
てでなければいけない。そのことは同時に、わたくしはちょっと言いかけてる
んですけど、説教学っていうのも神学全体にかかわる神学的営みだということ
280 なんです。ですからついでに言いますと、わたしが神学大学の教授だった時
に、みなさんも修士論文のことを考えるでしょうけども、わたくしは修士論文
で実践神学を選ぶ人を、ほとんどみんな断りました。特別な理由のある人以外
は実践神学なんかやるなというふうに一方では言っていました。それは確かに
それで、わたくしも実践神学、あるいは説教学をやれるようになったのは、東
285 神大で聖書学も一生懸命やりましたし、新約学の論文を書かされそうになった
こともあるんですけど、組織神学をやったってことはとっても大きいと思
います。今でも組織神学を大事にしていますけども、しかし、一方では、学生
時代に実践神学の何か特殊な部門に集中して勉強するっていうと、後が伸びな
いということを考えるんですけど、しかし同時にですね、そういうふうに狭く
290 考えてしまうと、実践神学のある一部のことに集中して、他のことを忘れ
るようなことをやったら、実践神学もものにならないという思いもあるんです。
そういうことで実践神学の論文を、だいたい論文指導っていうのはややこしい
ので、できるだけ逃げて回ったということもありますけど、そういうふうに
考えますけれども、しかし実際に実践神学なり、説教学なんかやっていると、
そこに神学全体の営みが集中してくるということを確かだというふうに思
295 います。で、そういうふうに言ったところで、「神学は——まことに多様なもので
あるにもかかわらず、——世界のいづこにおいてもただひとつ」。ここはとっ
てもおもしろいので、前の3行で何を言っているかっていうと、あの説教でも
説教学でも日本語でやらないとだめですよと、その助けになれば良いですね、
というように一步退いている。次の所で言っているのは「世界のいづこにお
300 いてもただひとつ」。日本語であろうが、ドイツ語であろうが、神学っていうもの
はひとつのものだ。で、神学というものはそのような二つの側面を持っている、
普遍的なもので、どこでも同じ神の言葉を語るわけですから、そういう意味で
言えばドイツ語であろうが、日本語であろうが同じなんです。それがしかし日

305 本語で営まれる時には日本語固有の響きをたてる。その両面性があるということだとわたくしは思います。(東神大読書会録音47分)

9 行目以下

310 この文章を書くに際し、今、わたしは、スイスの高い山々の中、わたしの祖先たちが生きてきた谷に座しているのであるが、同時に、感謝の思いをもって、一九六五年の夏のことを思い起こしている。それは、加藤常昭氏が、ドイツにやって来て、わたしのところに来ると告げてくれた時である。

***** (東神大読書会録音47分)

315 で、ここにスイスというのが出て来ます……非常に大事なことはボーレンさんがスイス人だということです。ドイツ人じゃないんです。これいろんな意味を持てます……スイスの観光旅行に行った人は必ずと言っても良い、アルプスの中心地があります。ひとつはモンブランの領域ですが[ここはマッターホルンかな?と。モンブランはどちらかと言えばフランスです]、もうひとつはユングフラウ・ヨッホ、ユングフラウという山とか、アイガーという山とか、その間にメンヒという山がありますけど、この3つの山を中心にしたベルン地方
320 のアルプスというのがあります。ベルンからちょっと南に下ってインターラーケンという駅からですね、山岳鉄道でずっと山の中に入って来た終点がグリンデルヴァルトというふうに言いますけども。このグリンデルヴァルトというのは日本人が非常に多いところで、グリンデルヴァルトの朝は日本人で町は占領されているということが言われるくらいに日本人が非常に多く来るところで
325 す。山岳鉄道はさらにユングフラウ・ヨッホというところへ、長いトンネルをくぐってアイガーの山の中を抜けるトンネルがあって三千何百メートル[駅は3454m、展望台は3571m]かのユングフラウのヨッホというのは肩というところですけども、一種の峠のようなところで、そこまで登れるわけで、ほんとうに日本人の多い所ですけども。



その

グリンデルヴァルトの村長の息子であった。おとうさんは銀行を作った人であったし、その村長でもあったし、おもしろいことに郵便局長でもあった人で、このグリンデルヴァルトにはボーレンという家は結構多いですね。グリンデルヴァルトの人はボーレン教授というのは故郷の生んだ名士の一人として非常に誇りに思っている。ボーレン先生の友人だって、ついでにわたしも尊敬され愛されていましたけれども。そういうところで育った人でした。

↓地元のユングフラウ新聞から

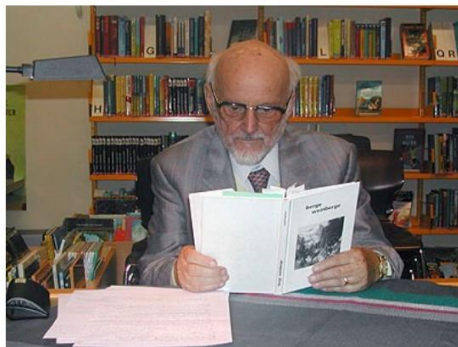
Grindelwald | 15. September 2005

Geheimschrift der Berge

Rudolf Bohren las aus «Berge Weinberge» in der Bibliothek Grindelwald

Der gebürtige Grindelwalder Professor Rudolf Bohren las gestern Abend aus seinem Gedichtband «Berge Weinberge». Die Liebe zu den Bergen in Grindelwald und zu den Weinbergen in seiner zweiten Heimat in Dossenheim Deutschland liess sich in jedem Gedicht erkennen.

von Yvonne Zurbrugg



Prof. Rudolf Bohren las gestern Abend aus «Berge Weinberge» – heimwehische naturfrönende Lyrik auf 97 Seiten.

«Ich darf mich setzen, dann bin ich jünger.» So Rudolf Bohren mit einem verschmitzten Lächeln nach einem kurzen Räuspern. In der Rechten sein Gedichtband «Berge Weinberge» in der Linken seine Lesebrille, begrüßte er sein Publikum in der Bibliothek Grindelwald. «Je älter ich werde, desto wundersamer erscheint mir die Natur. Ich frage mich: Ist im Stein noch die Erinnerung an die Schöpferworte 'Ich werde...'?» Der

ARTIKELINFO

Artikel Nr. 58565
15.9.2005 – 19.00 Uhr
Autor/in: Yvonne Zurbrugg

MEHR ZUM THEMA



Neuerscheinung | 6. November 2008

Beten will gelernt sein

«Beten mit Paulus und Calvin» Ist das neueste Buch von Rudolf Bohren. Der Grindelwalder Theologieprofessor hat sich bei ...



Grindelwald | 31. Januar 2008

Ein besonderes Geschenk

Japaner schenkt Bibliothek Grindelwald Bücher über seine Kultur



そして休みっていうと、夏休みでも冬休みでも必ずグリンデルヴァルトに、ある意味で帰って来ていました。家がちゃんとありまして、以前には2000mを越える高い、グリンデルヴァルトの中でも一番高い山の上に小屋を持ってい

350 ました。それを息子にゆずり渡して、グリンデルヴァルトの駅を降りて2分くら
い歩いたところに家を持っておりました。ついでに言うとおもしろいことに、
庭がすごく広いんです。もと牧場だった1000坪以上あると言って良いか、
355 もっと大きいか。その草地の中にスイス特有の木造の家を持ってまして。駅か
らすぐそばですよ。2、3分のとこですけども、その緑草地帯を売らないんで
す。引く手あまたなところで、そこにホテルが建ったらもうずいぶんもうかる
ようなところで、すぐ土地の隣はホテルですからね。ホテルの脇をって行く
とボーレンさんの家で、ずっと緑が広がってそのむこうにアイガーが、ずっと
360 アイガーの北壁が見えるようなところす。これはひとつのスイス人の考え方
ですね。インターラーケンという駅でも面白いもので、インターラーケンの駅
のまわりはほとんど何にもないんですよ。それはある個人が土地を持っててぜ
ったい売らないから。野原の中に駅があって、反対側にはちょっとありますけ
ども。そういう気風の人が多い。そこでボーレンさんは生きてるんでね。

360 第二巻の終わりに長いわたしとのインタビューがあります。インタビューの
中でわたしボーレンさんに言ってるんで、わたし春夏秋冬何度もボーレンさん
の家に遊びに行って、四季を通じてアルプスの中で暮らすっていうぜいたくをし
ましたけども、そのアルプスの山っていうのは日本のアルプスとはまるで違
ある意味で非常にデモーニッシュですね。山肌を見ていると恐怖を感じるよう
365 なそういう山肌ですけども。〔反論！たとえば北アルプスの、登山者しか来な
い場所まで行けば同じだと思います。逆に言えばグリンデルヴァルトのような
アイガー直下にありながら、鉄道が通り、大スキー場があり、大観光地になっ
ているような場所が日本にはあまりないということでしょうか？日本で言え
ば上高地、室堂？でも1年を通じて暮らすところではありません。〕それを見
370 ながら生きて来たっていう人だっていうのが、それがわたしは先生の神学にい
ろいろ影響を与えていると思っています。そういう「高い山々の中に、わたし
の祖先たちの生きてきた谷に座している」とはっきり言っています。これはい
ろんな思いを込めたものすけども、そこで1965年の夏、わたくしに会っ
たことを思い出している。

375

後ろから7行目

——ちょうどその時、わたしはこの本の著述にかかろうとしていた。わたしの親しい友人となった加藤常昭氏は、この『説教学』著述の開始、その成立にまことに積極的に参与し、今、またその翻訳という難事業を引き受けてくれたのである。わたしにとっては、これもまた恵みのしるし、**具体的な兄弟の交わりのしるし、そしてまた、キリスト教会の中にあっては、近くにある地方的なもの、世界的な広がりを持つものとの双方が、それぞれの場所と意味を持ち、しかもいかに互いに影響しあうことができるかの、よきしるしなのである。**

***** (東神大読書会53分)

この中で非常に興味がある表現は終わりから3行目の「地方的」という言葉ですね。ヨーロッパっていうのは、われわれはしばしばヨーロッパって総括的に考えますけど、ヨーロッパに暮らしてみても非常に強く感じるのは、この「地方的」ということです。たとえばドイツなんかはフランスに比べてもね、ドイツなんかは、フランスにもあるのは、ひとつの象徴的なことを言うと方言ですね。日本では方言っていうのは、どっちかっていうとあまり積極的に評価されない。近頃はいろんな意味で文学の世界なんかでは方言が意味を持つかもしれませんが、みなさんの中でも方言の強い地方で育った人は、その問題とぶつかるかもしれませんが、日本ではどっちかっていうと方言から抜け出せない人を馬鹿にするのが一般的な空気ですね。

そうかな？ と思いつつうーんとなるところです。読書会の2011年と今の2021年を考慮に入れましても。私事で恐縮ですが、わたしは18歳まで大阪の高槻で育ち、困ったことに30代くらいまでは、標準語と関西弁を完璧に使い分けていたのです。しかも無意識で！ 東京の友人に楠原君は関西弁出ないよねと言われ。大阪の友人からは標準語をしゃべらないんだ、と繰り返し言われていました。50代になって、自動翻訳が機能不全になったのか、しばしば家族から説教の言葉に関西弁がまじっていると指摘されるようになっていきます。

一方で、わたしはドイツ南部のバイエルン州の特にフランケン地方で長く暮らしたものですから、ドイツ語は完全にフレンキッシュです。うれしいことにミュンヘン大学のロールス教授の通訳をしたときは、話がはずむはずむ経験をしましたし、一度スイ

スのベルナー・オーバーランド(つまりグリンドルヴァルト界限)やリヒテンシュタインを訪ねた時は普通に会話出来ました。オーストリアのザルツブルクでは惨憺たんなる状況だったのでひとしおだったのです。

410

(東神大読書会 54 分)

平気で方言を語るようになったのも特に戦後の関西人だと思いますし、関西弁の影響は東京にも、わたしの子供の頃よりもみられません。これはわたくしはテレビの影響だと思うんですけども、テレビが普及する前は、わたしの子供の頃
415 頃は関西弁しか話せない人は、東京の中でもやっぱり一種の劣等感を感じていましたね。今は漫才ブームとかなんとかあるかもしれませんが、関西弁の方が威張ってますし [! ?]。東京の人間でも関西弁を使う人が出てきているぐらいですけれども、これは特別です。ですからもっとそれ以外の地方の人たちは標準語を語らせると、沖縄なんかに行くっていうと強制的に沖縄弁を捨て
420 させられました。

ドイツに行くとき非常におもしろいのは、あの方言に対する誇りですね。もうほんとうに自分の町の言葉がドイツで一番美しいとみんな思ってる。だからあの、たとえば特に農村の教会なんかに行って、わたくしが招かれて行って、教会員とおしゃべりしたりするっていうと、二度も三度も言われたのはしばらく話して終わると教会員がああ疲れたって言うんですね。どうして疲れましたかって言ったら、久しぶりに学校で教わったドイツ語をしゃべらされたから。あなたのおかげだ、なんてことを言われるんですけども。その国のその地方の言葉を大事にする。そしてその町の文化を大事にする。だから東京の文化とか、
425 関西の文化が全体を支配するっていうことはないんですね。(56分)

これは非常に大事で、この地方性とい意識が強いのはスイスです。スイスは小さな国です。小国スイスと言いますけども。しかもスイスっていうのは、ご承知のように国語がドイツ語とフランス語と、それからロマンス語という三つの言葉からなっているわけですね。特に、実際の公用語はドイツ語とフランス語とゆずれません。だからスイスに行って列車に乗っているとおもしろいので。
430 わたしはヨーロッパを旅行する時には良く列車に乗る。特に鈍行に乗るんですね。するとスイスドイツ語圏から鈍行で一駅ずつ西に入って行きますとね。ド

435

イツ語圏からフランス語圏に入った途端に、同じ車掌がいきなりフランス語を話し始めたりする。そして周りの人たちがほとんど全部フランス語を語る。つまりドイツ語圏の中で生活している人はやたらにフランス語圏に移らないですよ。フランス語圏の人はフランス語圏で生活をしていて。そこではフランス語で生活をしている。こういうことがグリンデルヴァルトでは際立っています。ボーレンさんの両親ってのは村長さんで有力者でしたけれども、村長になってから結婚したんだそうです。村人を挙げてお祝いをして、村長に村人たちがお金を集めてプレゼントしたんです。世界一周の旅行券です。たいへんな当時の金額ですね。ところが結婚式やって、グリンデルヴァルトの駅で見送って、翌朝、村人が目を覚ましてみたら、その新婚夫婦がそのグリンデルヴァルトの中にいる。前の日のうちに帰って来ちゃった。夜、帰って来たんです。せっかく切符あげたのに、いやグリンデルヴァルト以外に行くべきところはないと言っ

440

445

450

455

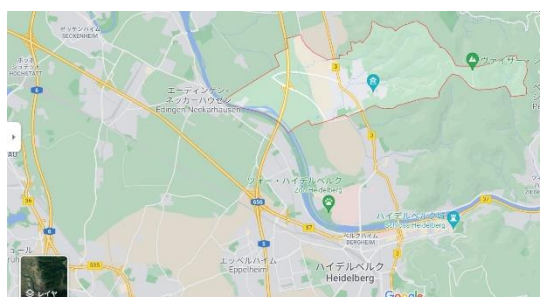
460

465

てのけた。ここが一番きれいなところ、一番美しい言葉をしゃべるところ、一番美しい景色のところって言ったんです。村人たちは大喜びしたって言うんですけれども。わたしに言わせれば狭すぎますね。わたしがその話聞いた時に、残念ですね、世界一周すべきだったのになって言ったんですけれども、それを理解しないのが日本人だなんて逆に言われました。そういうプライドを持っている地方性と、世界的な広がり

をボーレンさん両方見ているわけです。ボーレンさんの故郷意識って言うのは非常に強いものです。ですから去年クリスマスの時に、クリスマス前にちょっと長い手紙を書きましたら、ボーレンさんから手紙が来たんです。その手紙が来た、一番最初のところになんて書いてあったかというと、die letzte Station in Dossenheim letzteというのはlastです。Stationというのはstation[ステーション]。last station in Dossenheim。ドッセンハイムっていうのはハイデルベルクの郊外の小さな村で、そこにボーレンさんの家がある。わたしの最後のステーションと留まる場所はドッセンハイムだと書き始めていて、そしてスイスへの最後の旅行は今年の秋にもうすませたよと。おもしろいことに誰と行ったかってことは最愛の妻の名前は書いてなくて、新しく得た愛犬の名前が書いてあったので笑っちゃったんですけども、ドルチェという犬と一緒にいったって書いてあったんですけど、奥さんも行ったに違いないんですけども、そういうところにユーモアがあるんです。で

もわたくしはしかし、この last station はドッセンハイムっていう言葉にひどく胸をつかれました。ああスイスでしなないって決心したんだと。これはたいへんな決意をなさった。わたしはスイスでは死なないんですねって書いて
470 いるんですね。最期についてのわたくしの思いをちょっと書いて、長い手紙を書いて送ったんです。だけどその手紙は結局病床で、奥さんがボーレン先生の枕もとで読んで聞かせたそうなんですけども。そういうところにも、この故郷と結びついている人間の思いっていうのを、わたくしは本当に真剣に考えさせられました。そういうせまい、その地方的なところに一所懸命に生きていながら、
475 世界的な広がりを見る。世界的な広がりを見る手がかりを加藤君から与えられているという意味のところなんですね。〔東神大読書会録音 | 時間 | 分〕



ドッセンハイム!

3頁 後ろから1行目以下

480 この意味で、わたしの願うところは、この書物の中にある、日本の読者にとっては、わかりにくく、不慣れに思われるものもまた、**読者の方たち自身が、自分の場所で、更にその翻訳を試みる**ことで、やがてお役に立つようになること、なのである。

一九七五年夏 グリンデルヴァルトにて ルードルフ・ボーレン

*****〔東神大読書会録音 | 時間 | 分〕

485 実は「説教学」を読みまして、一番最初に、ここが良くわからなかったのです。ここで「**翻訳を試みる**」とは加藤先生の翻訳を越えたものという意味なのか?でも東神大読書会の録音を後で聞きまして、少し分かったような気がしています。以下、録音を参照してください。

490 ここに最後の願いとして書いているのもおもしろいことで、翻訳ができないほど特殊なことも語っているけど、できることならそれも翻訳して欲しい。この

翻訳という言葉は日本語では訳せない二重の意味を持っているわけで。翻訳って言うのは übersetzen って言うんです。über っていうのは、みなさんドイツ語をならったから知っているでしょうけど、越えるっていう意味ですね。あの、われわれの上高く über uns って。それを akkusativ 4格の名詞を使った時には上を通って向こうへ行く。setzen って言うのは置くって意味です。übersetzen てのは例えば、実際に物理的な意味で使う時には、川が流れていて、こっちにあるものを川の向こうに移すことも übersetzen って言うんです。ただアクセントがこの場合には分離動詞でイーバー・ゼッツェンって言うんですけども、イーバーゼッツェンって非分離動詞になると翻訳するって意味になります。翻訳ってのはこっちにあるものをこっちに移す。だからここには、日本語で書いてあるのはもう翻訳ですけども、向こうで言う自分の場所で、さらにその翻訳をっていうのは、今、あなたがたには分かりにくいなって思ってる。これ自分にとっては strange なものと思ってるものこそ意味があるかもしれない。あっちの問題だなんて思わないで自分たちの方に移してみたいと。それもまた意味があるだろうということを述べている。ボーレンさんっていう人は詩人ですし、あのこういうなんて言いますかね、簡潔な文章っていうのはただならないところがありまして、いろんな意味をそこにこめるんですよ。たった1頁ですけども、何十分か時間をかけて説明していますけども、あのそういう内容をもった文章だっていうことを知っていただけると良いと思います。

510 【東神大読書会録音1時間3分】

読書会での質問

問 ベルリン大学からヴッパータールに移って、その時から即、助手となられたのですか？

515 答 そう。そのほうが有難かったところもあるんですよ。なぜかって言うと一対一でドイツ語を使うわけ。広い教室でね、先生がむこうのほうで講義をしているのを、こっちでその他大勢の中で、一人として聞いている方が多分わかんなかったと思います。一対一だと分からないと先へ進めないんです。だからボーレン先生もわたしに分かるように言うし。もちろんわたしのドイツ語は向こうには分かるわけですから。とにかくわたしは外国語は不得手でね【またまた御冗談を！】、あのドイツ語で苦労しました。これは笑い話ですけども、自伝的説

520

教諭にも書いてありますけども。こういうことがあったんですよ。わたくしがもう日本にいる時からドイツ語の教師をしておりまして、ドイツ語がかなりできるつもりだったんです。それからドイツに行くことが決まってから、ちょうどゲーテ・インスティテュートっていうドイツ語の学校が、ミュンヘンに本部がある学校が、飯田橋に東京支所を作ったばかりだった。わたくしはその一期生で行ったんです。その中級クラス Mittel Stufe に、日本では最上級に入れてもらって、3カ月間ちゃんとやったんです。それでドイツへ行きましたら、そのゲーテ・インスティテュートのベルリンの支所へ行って、もう授業が始まっていたんです。わたくしはそこへ行ったんです。で、テストを受けたんです。

525 わたくしの学力を確かめた上で、どのクラスに入れたら良いかを決めるわけですよ。で、テストってのは学校の事務所の片隅にテーブルが置いてあって、事務員の女の子がテープレコーダーとそれから質問用紙を置いて行って、読んだら分かるからと言って、済んだら出してって言うんです。最初はテープレコーダーから出て来る音声を聞きとらなきゃいけない。その最初の質問たるや、あの

530 何百何十万何千何百って数字をば一っと読んでくんですよ。こんな悲劇的なことないですよ。それはドイツ語の場合にはですね百単位で読み替えて行くんですよ。だからたとえば343、521っていうふうに、数字を三つずつ分かち書きにして、それをドライフンデルト・ドライウント・フィヤツィッヒ、フィンフンデルト・アインウント・ツヴァンツィッヒ、あそうか、タウゼントっていうのが入って来るから、ドライフンデルト・ドライウント・フィヤツィッヒ・タウゼントとかって、もうかーっとなってね、分かんないですよ。それから

540 はじまっちゃってね、とにかく全部やって出した。見るなり事務員がね、ペって、悪い奴でふきだしたんです。それで、どこに牧場で黒い牛が寝てたの。それ言わなかった？そんなこと誰も言ってない。僕には緑の牧場に黒い牡牛が

545 こう寝そべってなんてすてきな風景だなあって思ったんだけど、そんな文章なんてまったくなかった。そういうことから始まって文法の試験なんかがある。それで外でちょっと待ってて、所長に見せて来るからって。支所長がまだ若い人ですけど、にやりとわたしの顔を見て、あなた typische Japaner ティピカルな日本人だ。ヒヤリングは0点。どのクラスにも入れようがない。1年生にも入れられない。こんな出来が悪ければ。けど文法が満点。ここで勉強する必

550

要はない。この落差の大きさは典型的な日本人だ。文法はここでも教えて良いぐらいちゃんと分かってる。聞く方は何にも分かっていない。今、話聞いていると、一応話すことはできそうだ。結局最上級のクラスに入れてくれたんです。聞くって言うのはたいへんでしたね。

555 だから難しい大学教授のドイツ語を授業のかたちでドイツ人の教授はだいたい読めますからね。原稿を持ってたら良いけど、原稿も抜きだと難しかったでしょうね。まあそういう意味では助かったんですよ。文章はここに書いてあるようなドイツ語の文章を書くことができるようになりましたからね、学問的な文章を。

560 そして1学期やって、もう1学期、夏学期残ってくれるかって言われたから残ったんです。残って何やったかっていうと、今度は先生授業に復帰してましたから。助手っていうのは、アメリカもそういうところありますけど、ドイツでは助手っていうのは緊急スタッフなんです。教授を助けて教えるので、いきなり夏学期は教える方に回ったんです。いろいろおもしろかったのは、ボーレンさんが講義をしました。Einführung in die praktische Theologie

565 ヴッパータールの神学大学っていうのは神学を学び始めた最初の学生が結構多いんです。最低12学期ドイツにいないといけない。しかも教会の規則で6学期以上国立大学神学部で勉強しないとイケない。そうするとはじめの何学期かを神学大学でヘブライ語や、ギリシャ語はだいたいみんなできるようになってるんですけど、そうですねヘブライ語、ギリシャ語が出来ない人はギリシャ語、ラテン語は神学大学に来る頃にはみんなできるようになってる。Hebraicum なんかやりながら、初歩的な講義を聴いて、国立大学神学部へ行って、今度は教師試験を受ける時に戻って来て神学大学で勉強する。だから最初の学年と終わりの学年はいるっていうようなことだったんです。ヴッパータル神学大学はラインラント (Rheinland) という領邦教会ですね。Landeskirche

575 の神学校だったんで、ラインラントの教会の牧師になろうと思う人はヴッパータルで最初にやるのは良かった。やるように求められたんです。そういう意味で新生と卒業間近の。わたしがやったひとつは新生のクラスで、とってもおもしろいことにボーレンさんが実践神学入門をやるんですけど、分からない学生がいる。それでボーレンさんにやらされたのは、その講義の後、すぐじ

580

585 やなかったと思いますけど、その日のうちに、わたくしが補講をしたんです。
つまりボーレンさんのやった講義の解説をやった。とってもおもしろかったですよ。
ずいぶん学生残りましてね。わたくしにいろいろ質問するんです。ボー
レン教授がこう言ったけどどういう意味だ。先生のかわりに説明するんです。
わたしはテープレコーダー持って行って、その部分をもういっぺん聞かせて、
これはこういう意味だって説明しました。学生とも仲良くなったし、わたしに
とってもそれは良い勉強で、つまり新入生にわかりやすく、先生が話したこと
よりも、先生よりも分かりやすく話をして聞かせるって言うのは、たいへんで
したけど良い勉強でしたね。(1時間13分)

590 それからもうひとつは卒業クラスの説教学の演習の手伝いをしました。先生
とならんで学生の指導をしました。これもですがボーレンさんのドイツ語は分
かるようになっていましたからね。講義聴いた後、その日のうちに講義はどう
いう話だったかちゃんと説明できるようになって。
問。ドイツに行かれたのは何歳くらいだったのですか。

595 答。1929年生まれ、で65年。36歳。
問。奥さんは。
答。おいてきました。お金ないもん。月300マルクで暮らせていうんで。
1マルク当時100円くらいだったかな。月3万円。ただし非常にありがたか
ったのは大学院助手として行ってましたから、助手の俸給はなしですよ。それ
600 はボランティアですからね。だけどそこでの滞在費から何から全部、ただ。食
費も払いません。何にも払わなかった。
ボーレンさんが文書にも書いてますけどもね。加藤さんにあって最初にヴッ
パータールで暮らし始めた時に、貧しさってこんなものかってしみじみ分かっ
たって。貧しさの象徴みたいな男が現れた。そりゃそうですよ。良く覚えてま
すよ、ドイツに行く前に子供たちに、もうちょっと前、東京オリンピックが始
605 まるっていう時かな。いくらなんでもテレビがない家でしたからね。子供たち
がさびしがっていたものですから白黒のテレビをですよ、4万6000円の月
賦で買って、置いてドイツへ行ったんですから。忘れがたいことですよ。4万
6000円の黒白テレビも即金で買えなかったですよ。そういう値段ちゃんと
610 覚えてんですよ4万6000円って。文章の内容については良いですか？

問。3 頁の 2 段落目の

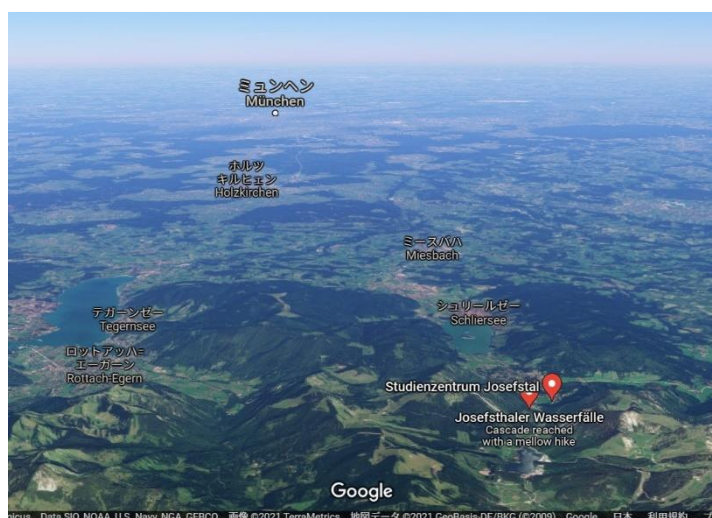
615 教會的に、また神学的に努力が更に続けられ、ここに明らかになってきているのは、
聖霊論的な手がかりから思索することが、いかに実り豊かなものかということである。
説教にたずさわっている者は、神学の全体にたずさわっているのである。神学は—
—まことに多様なものであるにもかかわらず、——世界のいずこにおいてもただひ
とつのものである。

620

答。こういうふうに言っ
てもいいので。聖霊論的なものの考え方っていうのをドイツでひじょうに真剣に
625 導入するようになったのはボーレンさんがはじめてです。これは近藤先生なん
かが研究の対象にしておられますけども、オランダでは聖霊論っていうのがす
でにしきりに語られるようになっていて、その代表的人はみなさんも講義で名
前を聞いたことがあるでしょうがファン・ルーラーって人ですね。このファン・
ルーラーって人ははっきりとバルトに対する批判を書いていて、キリスト論的
630 思索と聖霊論的思索の構造的な相違について書いた論文なんか発表して、当時
はドイツ語の翻訳はなかったので、われわれはそれに出入りしていた、われわ
れの仲間だったオランダ語ができるドイツ人の牧師によって翻訳をしてもら
いまして、それを読んだんです。ボーレンさんはそれに心惹かれました。そし
てその聖霊論っていうのを語るようになった。当時はまだ誤解されてましてね。
635 わたしがとっても良く覚えているのが、この頃に、ドイツで福音主義神学
evangelische Theologie っていう雑誌があります。その雑誌の Beiträger っ
ていう論文を良く書いている、ドイツの神学雑誌ってだいたい神学的立場が明瞭
でしてね。あの evangelische Theologie に書いてるっていえば、あなたは神
の言葉の神学の立場ですねって考えられるようにはっきりしてるんですね。そ
640 の福音主義神学に寄稿する人たちの会ってというのが、南ドイツの Josefthal

ていうとってもすてきなところでありまして。そこにわたしも招かれたんです。みなさんも名前を知っているでしょうけど、たけざわかつみという九州大学の教授もちょうどドイツにいまして、二人で招かれて行ったんですね。ミュンヘンから登山電車でちょっと入っていくんですけど、名前忘れちゃったけど、登山電車に乗ったらいかにも神学者って感じの、若いドイツ人の先生と隣り合わせに座ったんですよ。あいかわらず、わたくしはそういう時に遠慮がないものですから、Josefsthal にいらっしゃるんですかって言ったら、むこうびっくりしたような顔をして、evangelische Theologie の Tagung 会議に行かれるんですねって言ったら、そうだって。話がはじまったんで。向こうが聞くんですよ。

あなたは今、ドイツで何をしているんですか。ボーレン教授のそばで手伝いをしているって言ったんです。そしたらね、ちょっとびっくりしたような顔をして、あなたも Pneumatologe かって聞きました。Pneumatologe っていうのは聖霊論者かって意味なんですよ。あきらかに軽蔑のまなざしですね。つまり福音主義の聖霊主義者とごっちゃにされるところがあるんですよ。わたくしはそれには返事しませんでした。ボーレンさんのところ



Josefsthal

にいるからって Pneumatologe だって決めない方が良さだろうってだけ言っておいたんですけど。そしたら、どうもごめんなさいって言いましたけれども。その時に明らかにボーレンさんに対する偏見があると思いました。それは、ひとつにはボーレンさんの本で、In der Tiefe der Zisterne 「天水桶の深みにて」っていう本があります。これは名著です。是非読んだら良いって思いますけども、出版局から出してます。この「天水桶の深みにて」の中でボーレンさんが書いている一つのことは、最初の奥さんが鬱病で自殺したってことです。ボーレンさんもその奥様を看取っている間に鬱病気味になって、その自分の鬱病にどうやって戦って勝ったか。手記みたいなものです。その中で最初の奥さんがなぜ鬱病になったか。Basel の良くバイオリンを弾くお嬢様だったんです

よ。名士の出で、スイスで結婚して牧師の妻である間はおだやかでしあわせだったんですけど。夫に付いてヴッパータールに行ったわけです。教授夫人になった。それだけでスイスの女性にとっては非常なプレッシャーだったんですね。教授夫人であること。それからドイツ人というのはスイス人を蔑視しているところがあるものですから。その軽蔑の眼差しに耐えなければいけない。そしてもうひとつは、その頃ボーレンさんは、ある会議に招かれましてね。当時は批判的な新約学がひじょうに盛んだったんです。Ernst Käsemann てのが帝王のごとく君臨してたんです。その Käsemann がいる会議でボーレンさんは説教者の立場から批判的な釈義の批判を行ったんです。あなたがたは聖書を学問的に読んで見せるなんて言うけども、あなたがたが教えた釈義を教わったおかげで若い学生たちが説教ができなくなっているじゃないか。それは批判的な学問そのものがおかしいと。そしてその講義の終わりにこう言ってのけてるんですよ。だいたい聖書を解くのにお祈りしないでわかるかって。これはもうたいへんある意味で憤激を買ったんです。学問に祈りを持ち込む。ドイツの学問的な研究を主張する人にとっては侮辱と言って良いくらい。そのことがあってボーレンさんはドイツの神学者の中でひじょうに評判が悪くなってしまった。それと重なって聖霊論を言うものですから、悪く言えば神がかりの聖霊様っていうか何かと同じようなやからだと思われた。非常な誤解の中にありました。それでボーレンさんは教会的にも神学的にも聖霊論的な手がかりからやらないと実り豊かなものにならないんだということを、だんだんと分かって来たようで。確かにそういうところがあるようで。これ書いているのは1975年で。「説教」を書き始めてから10年経ったところで、少しずつ理解者が出てきているというところですね。今、神学大学の講義では聖霊論って話を聞きますか？近藤先生なんかはする？組織神学の講義で（1時間24分）。

（答。……独立したものではないですが。話の中では聖霊論と。
この場合ではただ聖霊を語るのではなくて、キリスト論 Christologie ですけども、キリストを中心に据えてものを考えるということですね。イエス・キリストの存在と働きを中核にして、それによって定まった、わたくしのものの言い方だとパースペクティヴの中でものごとを理解し考える。それに対して聖霊論っていうのは聖霊の存在と働き。そのことを視野に入れたところで神のこと

がらを捉える。そこでわたくしはキリスト論と聖霊論とを分けるなという主張
なんです。キリスト論を聖霊論的なパースペクティヴ抜きでは言えないはずだ
ってというのがボーレンさんとやり合ってる時にしょっちゅうそう言ってたん
ですけど。明らかにしかし、このキリスト論と聖霊論っていうものの考え方が
705 区別されるところがある。わたしは分離してはだめだって言うんですが、分け
られることがあるんです。だからものを理解したり、考えたりする時に、ひと
つの言い方をすると思考行動、われわれのものの考え方や論理の組み立て方を
キリスト論的にするか聖霊論的にするかで違ってくる。これはとっても大事な
ことなんです。本当はみなさんは大学の講義でちゃんと聞いておくべきことで
710 すね。ただ聖霊について語るってことは、ごく当たり前のことです。組織神
学やれば聖霊について語らざるを得ないわけです。たとえばここで言うと説教
ですけども、説教をキリスト論的に捉えるか、聖霊論的に捉えるかで、捉え方
がまるで違う。これは本論で、今年の秋ぐらいにならないと、そこまで行かな
いかもしれませんが、はっきり出て来て、これはひじょうにおもしろいこと
715 す。今になって、たとえば説教塾で講演をして、ふっと思立って「説教学」
を読んでみると、なんだここに書いてあるわって思う時に、それは聖霊論的な
構造で論じている時のことなんです（1時間26分）。

720 **5頁 はしがき**

「はしがき」の本文に入る前なのですが、改めて「説教学」ドイツ語原本を読んで驚
きました。読んでいて気持ちが良いのです。申し訳ありませんが、「はしがき」の最初
のパラグラフだけドイツ語で読ませてください。たとえドイツ語がわからないという方
725 も、その響き、語感の美しさがわかっていただけるのではないかとも思うからです。

VORWORT

730 Daß das Schweigen um Gott gebrochen werde, und er selbst sein
Schweigen breche, ist das A und das O aller Predigtprobleme und

-nöte der Gegenwart; die Predigt verfehlt alles und verfehlt sich am Menschen, wenn sie Gott verfehlt.— Eine Predigtlehre wird nicht so vermessen sein, ein Schweigen brechen zu wollen, an dem die Zeit leidet. Sie sollte aber den Weg durch dieses Schweigen hindurch markieren, bis hin zu jener Grenze, an der das Wort geschieht. So liegt das Ziel und der Zweck dieser Predigtlehre außerhalb ihrer selbst.

このことはボーレン先生ご自身詩人でもあられたからでしょうか？〔東神大読書会の中でもそういう言及がありました〕「説教学」のテキストの Formulieren——文書化中のエピソードなどはあるのでしょうか？

1行目

最初に、加藤先生の翻訳のことですが、まずなぜ「はしがき（端書）」と加藤先生が訳されたのかが知りたいと思いました。わたしは通常「序」あるいは「序文」と訳します。ただ和文、特に和歌などでは「はしがき」なのですが、そこあたりに理由があるかとも思うのですが、いかがでしょうか？

2行目

神についての沈黙が破られるということ、そして、神ご自身がその沈黙を破られるということ、それが現代の説教にかかわるすべての問題、および説教のすべての危機の、アルファでありオメガである。

説教が神を語りそこなう時、説教はいっさいを語りそこなったのであり、人間に対する自分の本来のあり方を誤ったのである。

5行目

——ひとつの説教学が、現代の苦悩の源であるこのひとつの沈黙を破ろうとするほど、僭越であることはないであろう。しかし、この沈黙の中を突きぬけて、言葉が出来事となるあの限界点に至る道程をしるすべきではあろう。この説教論の目的・目標とするところは、そのように、はじめから自分自身の手にあまるのである。

8行目

この書物のための仕事をしている間に驚くべき発見をしたことがあるが、そのひと

つは、**聖書が説かれていない**ということである！テキストについて沈黙してしまっていること、福音の使信に与えられるべきアクセントが**よそへ移行**してしまっていること、**不愉快なものは抑圧**してしまっていること、

10行目

765 更にはまた、聖書をあまりにも急いで開きすぎること、テキストの文字そのものに無思慮に固執し、**テキストをめぐる聞きあきたおしゃべり**をすること、そのいずれにおいても、**神についての沈黙が広く広がっている**。聖書について説教がなされないということがその書物を閉ざしてしまった。**聖書は沈黙している**のである。沈黙が破られるならば、それは語られ、聞かれるようになる。

770

後ろから4行目

説教論というのは、聖書に対してこの世を、この世に対して聖書を開示する助けをしなければならないはずなのである。そこで説教論はそのような開示をしてくださる方、すなわち来りつつある聖霊を指し示すことによって説教するための、新しい神学的手がかりを求める。

775

PDF でお配りできるので、色を使わせていただきます。ポイントは赤にしたり、下線を引いたり、さらにその中での強調は **青色** を使わせていただきます。緑色 はわたし個人のコメントです。

780

この部分は急所です！「聖書」と「この世」に対する「説教論」の役割。そして「新しい神学的手がかり」として「聖霊を指し示す」という事が提起されます！

後ろから2行目

785 この説教論は、**神学の専門家以外の人々の言葉**にも耳を傾ける……

たとえば文学者として、**あの神の沈黙がこの世に投げかける影**に対して、**それなりに対決している人の言葉**を聞きとる努力をもするつもりである。

6 頁 3行目

790 神が沈黙を破るべきだとすれば、**キリスト教界内部の対話**が行なわれなければなら

ない。聖霊論を説教の行為との関わりで考察するに際して、エキュメニカルな次元(1)が、わたしにとって徐々に重要なものになってきた。

795 614頁訳注(1) 日本語では……世界教会運動……のレベルでのみ理解されやすい。しかしドイツ語で言う場合は、ローマ教会との関係で考えられることが多いようである……この『説教学』も、ローマ教会においてかなりよく読まれているようである。

4行目

800 しかし、英語圏の研究労作を有効に用いたいという最初の計画は——他のよき諸計画と共に——力量と時間の不足から放棄された。

6行目

時間の制約のもとで……説教学上のすべての認識を提供することよりも……このような過渡的な時代にあっては、伝統的なものも、新しい、現在台頭しつつあるものも、いずれも批判的に弁護すべきだと考えた。

805 *****

これは後でわかるのですが、「批判的に弁護すべき」という言葉が少々ひっかかりました。

10行目

810 わたしはこの書物を、カトリックの人々にも、ルター派や改革派以外の諸教派の教会の説教者たちにも読んでいただきたいと思って書いた……徐々に説教者として用いられるようになってきている信徒の人々のことを特に考えた……神学的に立場を異にする人々も読んでくださり、この書物に腹を立てるよりも、むしろ利益を得てくださればと思う！

後ろから7行目

815 この書物の読み方について……各章はそれだけで独立に理解することができ、わかりやすいはずである……もちろん、神学的に……この書物は全体でまとまっており、それぞれの発言は、この全体との関連で考察されるべきである……特に問題となったのは、その時その時に適当な文献を挙げるということ……引照する本の数を制限しなければならないためによけいに困難であった……各章に掲げられた表題は、一部は、そのテキストをどのように用いるかを、明瞭に、あるいは暗黙に示すものであ

820

り、またあるものは勉強する人々のために指示を与える役割を果たしている。

引照する本の取捨選択についてはエピソードがあるのでしょうか？

825 7頁1行目以下 謝辞。この部分についてはいくつかを取り上げるのみとします。

スイスのアールガウにあったホルダーバンク Holderbank (Aargau) の教会と、アルレスハイム (Arlesheim) の教会(2)に感謝する。そこで説教することはわたしの喜びであった。これらの教会の説教体験がこの書物において結実したのだと思っている。

830 *****

614頁訳注(2)ホルダーバンクとアルレスハイムは、ボーレンが、神学をベルンとバーゼルで学んだのち、最初に牧師として住んだところ。

ホルダーバンク(アールガウ)



835 採石場のある町です。このところ、わたしがすぐに思い出したのは、冬の名古屋セミナーで加藤先生と意見を異にしたところ。わたしはボーレン先生が言う工場の美しさに大いにうなずいたのですが、加藤先生は理解できないと言いつけられたのです。確かにボーレン先生の「神が美しくなるために」ありました(144頁以下です)。

第三章 神学的美学としての実践神学 第一節 神学的美学

導入

840 問題に光を当てるためにその手引きとなるように、まずふたつのエピソードを語ろう。スイスのアールガウにあるホルダーバンク村[ボーレン教授が牧師をしたところ]は、あるセメント工場によって支配されているようなものであった。ホルスト・ジマノフスキー (Horst Symanowski) が一度講演にやって来た。ジマノフスキーはま

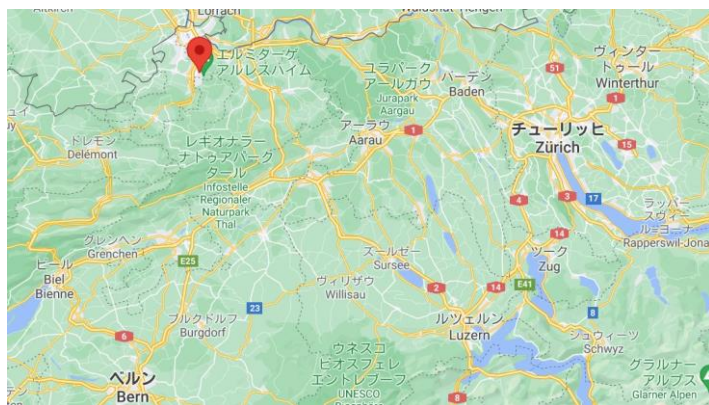
845

たセメント工場を見せてもらおうと思っていた。ジマノフスキー自身もセメント工場において産業牧師として働いていたからである。一周した後に大きなホールで燃焼炉の前に立って、ジマノフスキーはこういった。「このなかには音楽が聴こえる」。

850

第二のエピソードは……スコットランド……われわれ語学校の生徒たち……いくつかの見物をしなければならなかった。そしてドライバークの修道院の廃墟も訪ねたのである……修道院の建造物は、私には天国の比喻であるかのように思われた。…
…神が実践的になられる……神学的美学というのは、自然のなかにおける神が美しくなれるということを考察し、文化のなかにおいて、つまり、尖塔の技術においても、工場のホールにおいても、社会が美しくなることのしるしとしてそれを見る……

アルレスハイム 首都ベルン近郊の町です



855

7頁4行目以下

説教論をくり返し問うた説教者、学生たちに感謝する……

わたしのよき、有益な仲間[Weggenossen]である、ヴッパタール神学大学の…
…代表として、特にユルゲン・モルトマンとゲオルク・アイヒホルツ……

860

7行目

長い準備ののちに、一九六五年から六六年にかけての冬学期に、この書物の下書きを始めた時、日本から来た加藤常昭氏がヴッパタールに滞在し、毎週批判的意見を述べつつ共に仕事をしてくれた上に、若い教会の状況に触れさせてくれた

865

[Als ich nach langer Vorarbeit im Wintersemester 1965/66 mit der Niederschrift des Buches begann, war Tsuneaki Kato aus Japan in Wuppertal, **begleitete** meine Arbeit Woche um Woche mit kritischen

Kommentaren und brachte mir die Lage der jungen Kirche nahe.]
——マンフレート・ヨズツティス氏には、多くの刺激を与えられた。彼は最初の草稿を
通読し、批判的にそのすべてにわたって、わたしと討論する労を惜しまなかった——
870 これをもう一度新しく改稿するに際しては、わたしは、作家のゲアハルト・デーブス氏
といっしょに仕事をした……

後ろから1行目以下

最後にもう一度、アルレスハイムの教会、ジャン・ボナール牧師に感謝する……更に
同教会長老会に感謝する。この長老会はわたしを力づけ、耳を傾けて聞き、勧告し、
875 あるいは反論を加え、わたしの説教の教師となってくれたのである。

これらの多くの援助者の助けなくして、この書物は決して成立しなかったであろう。
これらの助けは、わたしにしてみれば、学生にとっても説教者にとっても約束に満ち
たしるしなのである。

880 一九七一年聖霊降臨節に

ヴッパタールにて ルードルフ・ボーレン

15頁 第一部 序論的行程 [ANLÄUFE 助走]

17頁

885 1行目

今日の講壇に支配的な倦怠の事実直面しつつ、著者は、情熱をこめて、説教す
るということのために弁論する。説教の言葉——神の言葉、人間の言葉、そして人間
のための言葉がひとつになっているもの——は、何よりもまず第一に、ある特定の人
間の語る言葉として聞かれる。説教の教師そのものが、自分は情熱的な説教者であ
890 ると考えているということから、この説教論は始まるからからである。

早速急所だと思われるのは、この「自分は情熱的な説教者であると考えている」で
す。というか考えているのか？どうか？

895 5行目 第一章 情熱 [Leidenschaft 激情、熱狂の意味さえあり]としての説教

わたしが情熱をこめて、好んですることが四つある。絵〔水彩画〕をかくこと〔**ボーレン先生の絵が見たいです!**〕、スキー、木を切り倒すこと、そして説教である。(4)
情熱というものは、すばらしいもの、しあわせを与えるものだとわれわれは感じとる。
900 **情熱は祝福を開示する**〔Vier Dinge tue ich leidenschaftlich gern: das Aquarellmalen, das Bäume fällen und das Predigen. Eine Leidenschaft empfindet man als schön, beglückend, sie eröffnet Seligkeit〕。白い画布、絵筆と絵具、何よりもさまざまな色彩、そこにひとつの新しい世界が生じる。そしてわれわれは夢中になるのである。——けわしい壁、粉雪が舞う。スキーに支えられ、
905 重力を失ったかのように、空間と時間の支配者となって、走りに走る。地上から全く自由になりつつ、しかも地上にあり、雪の中に飛び込んでいく。——傲然と立つ木、さからいつつ立つ木、これに攻撃を加えるには戦法を練らなければならない。知略も必要であるが、何よりもねばり強さがなくてはならない。こいつはむかってくるからである。その傲慢がみじんに碎かれるまでは、自分はこの木に勝てないのではない
910 かと思う瞬間もあるのである。——絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、それはわたしの心を燃やす——そして説教するということもそうなのである。**説教することが開示する祝福をわたしは描き尽くすことができない。**

614頁訳注(4)ボーレンは、別に紹介するように、スイスのグリンデルヴァルトの出身である。この町にボーレン姓を名のる者はかなり多い。その父は、この町の町長だったのであり、今も、この町に属するブラットマートに山荘を持つ。スキーは、この町で幼少の時に習い覚え、一時はスキー教師を志したほどである。今も冬にスキーを楽しむ。また、この山荘で、絵筆をとり、主として和紙に水彩を描く独特の画風には趣がある。夏には、近くの山林にわけ入って木々を切り倒し、斧をふるって薪をつくる。
920 本当は、これに詩作が加わってもよいのであるが、文学についての情熱を、ここであえて語らないのには、それなりの理由がある。詩を作ることは、苦しみの一語に尽きる、とある時、ふともらしたことがあるのである。

訳者あとがき 636頁後ろから6行目

925 教授の山荘は、今もなお、この町に属するブラットマートというところにあります。アイガー北壁を仰ぎ見る丘の頂に近い、素朴な山荘に、冬も夏も、幾日も過ごした私

は、教授の思想や心情の形成に、この故郷の風土がどんなに重要な意味を持っているかを思わずにおれません。

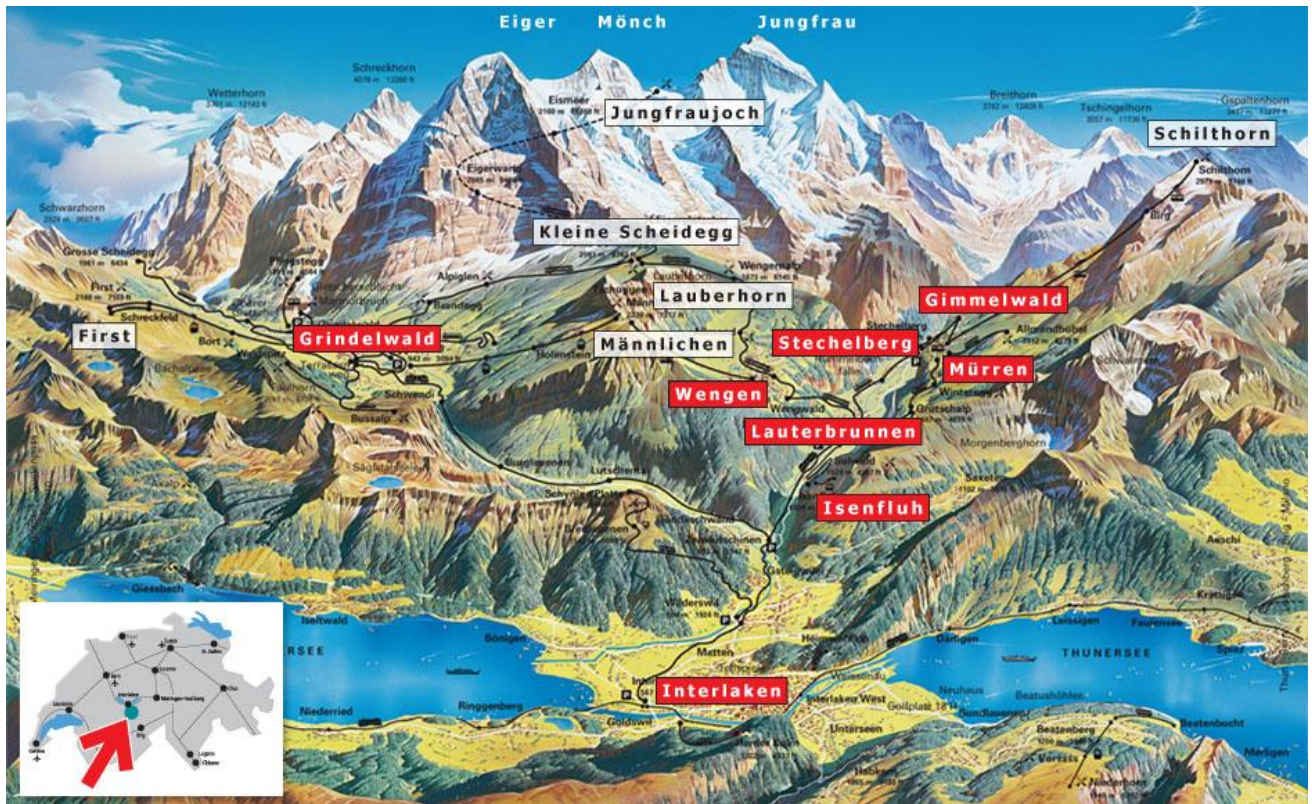
七三年夏までは電燈もなく、ランプをともしていた、この山荘で、絵をかき、木を切り倒し、スキーをするという、この書物の冒頭に出てくる、説教に並ぶ三つの情熱のわざに打ちこんだのです

637頁 2 行目

スキーに至っては、目もくらむような急坂を直滑降、クライネ・シャイデックという峠から一気にグリンデルヴァルトに降ったりしました……いずれにせよ、その山荘のわきに立って、あかあかと夕日に燃え立つようなユングフラウや、静まりかえりながら烈しい迫力を見せるアイガーの巨大な北壁を見つめていると、この自然の中に生き続けることが、その人の魂の形成にどんなに深い影響を及ぼすかはかりしれないと思います。

ブラットマート(Blattmaad)は下のパノラマ地図の左真ん中あたり、グリンデルヴァルトの駅からいちだん谷に下りたグルント(Grund)というところから右手のメンリッヘン(Männlichen)というところまでロープウェイがあり、さらにその途中にホーレンシュタイン(Holenstein)というところがあります。そのホーレンシュタインからグルントにくだる途中に、ブラットマートというところがあるのです。ですからボーレン先生の山荘はパノラマ地図のほぼ真ん中あたりにあったと考えて良いと思います。さらにその下の写真はハイキングコースになっている、その下り道の途中からのものだそうです。左手奥の山がまさにヴェッターホルンです。加藤先生によりますと、この山の具合を見て、天気(ヴ

エッターWetter)を知るそうです。いわゆる観天望気というものです。



950 おまけ

現在グリンデルヴァルト（旧グルント駅）は地下大駐車場を備えたモールになっており、そこからクライネ・シャイデックまでアイガー・エクスプレスというロープウェイが建設され大きく変容しています。



955

ずいぶん脱線しました。「説教学」本文に戻ります！

わたしが情熱をこめて、好んですることが四つある。絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、そして説教である。情熱というものは、すばらしいもの、しあわせを与えるものだといわれわれは感じとる。情熱は祝福を開示する……絵をかくこと、スキー、木を切り倒すこと、それはわたしの心を燃やす——そして説教するということもそうなのである。説教することが開示する祝福をわたしは描き尽くすことができない。

960

18頁 | 行目以下

今述べた三つの働きはすべて、説教することのたとえとして通用する。特別な方法で描くこと、走ること——新約聖書はひとつの「道」について語る——樹木ではないが、神の認識にさからうあらゆる建築物を破壊すること、そこではいずれにせよ、新しい世界が、自由が、戦いと勝利が大切なのである。それゆえに、説教することはすばらしいのである。もとより説教は水彩画と同じく失敗することもあるし、スキーをしている時と同じように倒れることもあるし、都会育ちの男が木を切る時のように疲れ果てて、絶望的になることもある。だがしかし、説教することはすばらしい。それは喜び〔イタリック〕をつくる。これが説教学において学ぶべき第一のことである。第一章における第一のことはこうである。説教学とは、喜びをめざす教えである。

970

975 [Predigen ist schön, es macht *Freude*. Das ist das erste, was in einer
Predigtlehre zu lehren ist. Punkt eins im Paragraph eins lautet:
Predigtlehre ist Lehre zur Freude;] 説教への手びきは、喜びへの手びきで
ある。説教するということは、喜びへと至るべきなのである！ この喜びの中で、神に
ついての言葉は、その目標に達する。喜びは、神についての、あの最も優しい証明を
作りあげる。この証明は、諸思想を力づくで倒さず、むしろ救いあげてしまうので、神
980 学者たちには不愛想に軽蔑されてしまうものである。[In der Freude kommt die
Rede von Gott zu ihrem Ziel. Freude bildet jenen zartesten Beweis
Gottes, den Theologen oft deshalb grämlich verachten, weil er die
Gedanken nicht vergewaltigt, sondern mitnimmt.] (他の箇所、特に第二章
第Ⅱ節第一項を参照のこと)。

985 最も優しい証明 zartesten Beweis

諸思想を……救いあげてしまう weil er die Gedanken…mitnimmt [mitnehmen]

mitnehmen の加藤先生の訳！ 加藤先生の意識？

mitnehmen 持っていく ? (すかさず) 利用する ? (口語) (機会などを) とらえる

990 後ろから 8 行目

わたしの趣味とするところを……説教することと同列にすることをしたのは、思慮あ
ったのである。結局は、説教は、木を切ることとは違って、休みの日の仕事
[Freizeitbeschäftigung]、日曜日の仕事 [Sonntagsarbeit] なのである。そ
れは喜びを作るべきなのである！

995 *****

主の日、日曜日の仕事はわかりますが、休みの日の仕事というのが引っ掛かります。
Freizeitbeschäftigung 余暇利用の [趣味的な、レジャー] 活動。趣味の活動 ←
→ しばしば話題になる Dienst おつとめの反対の意味で用いられるのでしょうか？

後ろから 6 行目

1000 使徒パウロは福音の伝道者を「喜びのために共に働いている者」[第二コリント一・
二四]と呼んでいる。説教を準備するとは、喜びの備えをすることであり、そこでは気
むずかしかったり、中途半端であったりすることはあり得ず、ただ**全く喜んで、つまり**

情熱的に事にいそしむのである。そしてそのことによって、すでにわれわれ自身が、来りつつある喜びの中に引きこまれてしまうのである。

われわれのさまざまな労働が疎外のもとにあるのではなく、アダムの呪いのもとになかった〔以降、オレンジ色は、心惹かれる表現につけます!〕としたら、おそらくいっさいの労働が休みの日の仕事となり、喜びの地平の中に置かれることになる。喜びに仕えるものであるはずなのである。そうとすれば、説教の作業は、いっさいの人間の労働の具体的典型であるともいえよう。説教作業の中にひそんでいる可能性は、その本質を明らかにする。説教をめぐる努力する者は、労働の前衛（アヴァンギャルド〔1. 先駆者、開拓者；（芸術運動などの）前衛派の人. 2. 前衛〔部隊〕〕）に属する。説教者というのは、原則的に言って、先立って働く者 Vor-Arbeiter なのである。

ボーレン先生の造語、言葉の二重の意味 (Wortspiel) ?

Vorarbeiter〔独和大辞典〕（職工の）監督、（工場の）組長、職（工）長、工夫長、職工頭、人夫頭。

Vorarbeiten 1. （仕事の）下準備〈下ごしらえ〉をする、準備作業をする；予備工作〈根まわし〉をする。2. あらかじめ〈前もって〉仕事をしておく 3. （…に）仕事の手本を示す。

Vorarbeit （仕事の）下準備、下ごしらえ、準備作業；予備工作、根まわし。

3行目

説教者がなすべきことというのは、いっさいの作業が、意味深い、固有の仕方で、それに向かうべく定められているようなこと、つまり、喜びをこの地上にもたらすための助けとなるということである。このような観点においては、説教することは、遊びの性格を持っている。このことによって、すべての説教に共通の唯一の基本的性格を語るわけではないが、この特質を無視することはできないのである。何よりも神の言葉を賛美し、歌いあげている詩篇第一一九篇〔アルファベットによる詩。訳注から「一種のいろは歌」〕が、その原文においては文字による遊びを表しているということは、ほとんど偶然とは言えないのである。（5）詩篇作者にとっては、この遊びの形をとるこ

とが、神の言葉について語る正しい方法であったことは明らかである（ここでは遊びたわむれる〔Spielerische〕なのであって、賭けて遊んだ〔Verspielte〕わけではない!）。

spielerisch 1. 遊びの, 遊び半分の 3. 不まじめな, おざなりの.

verspielen 1. 賭事で失う, 賭博〈ばくち〉でする; 2. 賭ける 3. (時を) 遊んで過ごす

後ろから 8 行目

各福音書における最も特徴のある語り口が、やはり遊びの形態のものであるということも偶然ではないし、われわれの説教にとって無意味ではないであろう。即ち「遊びとしてのたとえ (Das Gleichnis als Spiel)」(ゲオルク・アイヒホルツ) である。そうになると、説教するということは、言葉による聖なる遊戯である。宗教劇〔Sakralspiel〕というのではない。むしろ子供の遊び〔Kinderspiel〕である。話すことを学ぶ「幼な子」〔Kindlein〕の遊びである！ わたしが思うに、多くの説教者がこの事情を忘れ、そのために自分のやっていることを喜ぶことができなくなっているのである。自分がホモ・ルーデンス (遊びの人) (6) であることを説教者が忘れてしまうと、容易に、預言者の衣で着飾った、講壇上の悲劇役者になるか、あるいは、もっと悪いことに、しかも残念ながらこちらの方が広く見られる現象であるが、退屈な人間になってしまうのである。

遊びの概念については次のものを参照していただきたい。〔以下参考文献あり〕

614頁訳注(6)注の必要もないと思われるが、オランダの文化史家ホイジンガ(一八七二—一九四五年)の有名な著作『ホモ・ルーデンス』の題名から、知られるようになった概念。ついでに言えば、ボーレン自身が、あとがきで挙げる文献の示すように、この問題について一書を著している。一般的に言っても遊び、遊戯を積極的に評価しようという傾向は、かなり見られるようになり、一種の流行とさえも言いうる。神学の世界でも、そうなのである。

20頁後ろから11行目

わたしの言うことを誤解しないでいただきたい。遊び〔Spiel〕というのはふまじめなこと〔Unernst〕、だらしのないこと〔Schuldigkeit〕を意味するものではない。そのような人間は、遊んだとしても、説教を悪くもてあそんでしまったのである。そういう人は、偽りの遊びをしていることになる。遊びとは、ここでは、中途半端ではなくて、情熱的な喜びをもって、それに参与しているということであって、事柄の真剣さを疑うことではない。ただ、われわれが人間であって、神ではないことを承知しているのである。説教者がホモ・ルーデンスであるということの意味は、おそらくこういうことになる。説教者は、説教がなすべきことを自分で「作り出す」ことはできない。理性の啓蒙を知り、自己の成熟を常に賞賛し続けているようなこの時代にあって、全くの最初から、ほかならぬこの特質をこそ強調することは必要である。それは幼な子のごとき語り方をするように励ますためではない。逆である。聖なる遊戯としての説教は、知恵をもって説教することとも言えよう。この知恵は——箴言第八章三〇節によれば日々に恍惚たる喜びであり、神の前に常に遊び楽しんだのである。もとより、この知恵のたわむれが、この世の賢者たちには不可解なままであることもありうるであろう。

楠原の私的宿題（説教シンポジウムから）

2011年4月2日付けていただいた加藤先生からのメールに次のようにありました。「私が説教者として関心があるのは、知恵文学です。知恵文学と言っても範囲は広いでしょうが、知恵文学と呼ばれるものの誕生と、それが意図したものは説教者の関心と深く関わっていると思っています。つまり説教のパースペクティブと知恵文学のパースペクティブとは関わりがあると思っていますのですが。」これが……ひとつの宿題となりました。そして「聖書が説教をどのように理解しているか」あるいは「あるべき説教の言葉」をたどるため、旧約聖書の知恵文学と説教との接点について言及する言葉を探すことをします。

G・キッテル編の新約聖書神学辞典の「知恵（すなわちソフィア）」

G・フォーラーの次のような言葉がありました。

「人格化された箴言1-9章のホクマー〔ヘブライ語 知恵〕はその宣言において、預言者のように、高貴な権威を主張する意味で啓示を仲立ちする者である。それは神

の御意志を人間に明らかにして、人に命を与え、それを受けることが神の御意志であるとみなすのである」(G・フォーラー 7巻494頁)。

1095 箴言の知恵が人格化されるのですが、ここで言われているのは、箴言が、われわれが理解する宣教者、説教者の務めを担っていると言えるのではないのでしょうか。

1100 さらに次のような言葉もあります。知恵の伝承について。「あくまで人間を中心に考え……その人生を意義あるものとしてくれるのは何かを問うた」(和田幹男「新共同訳旧約史書注解Ⅱ」18頁)

さらにヨブ記について。「なぜ人はこの世で苦しみ、悩まなければならないのか。しかもなぜ、何の理由もなく悲惨なことが身に起こることがあるのか。このような人生に、はたして意味などあるのだろうか。この世界そのものが不条理にできていて、正義なる神などいないのではないだろうか……ヨブ記はまさにこの問題を正面から取り上げ、解答を求める」(同21頁)。人が善を行えば幸いになり、悪を行えば不幸になるというモラルの秩序を前提として、正しい生き方とはいかなることかを教えた賢者の言葉を集めた箴言に対して、ヨブ記は現実からの反論であり(同21頁)、「どこまでも神との人格的な交わりの中で解決策を模索する。コヘレトには、ヨブのような神への信頼が欠けている。コヘレトの神はイスラエルの歴史を導いた神ではない」(勝村弘也、同222頁)。

さらに「説教学」の中でルドルフ・ボーレン先生が繰り返し「知恵」について言及しています。「説教するということは、言葉による聖なる遊戯である……話すことを学ぶ『幼な子』の遊びである！」(R・ボーレン「説教学Ⅰ」19頁)

1115 「聖なる遊戯としての説教は、知恵をもって説教することとも言えよう」(20頁)。
その知恵とはと R・ボーレン先生は述べ、箴言8章30-31節を挙げられるのです。
「御もとにあって、わたしは巧みな者となり 日々、主を楽しませる者となって 絶えず主の御前で樂を奏し 主の造られたこの地上の人々と共に樂を奏し 人の子らと共に楽しむ」。あるいは、喜びのかたちとして、「イスラエルの知恵は恐れと喜びが兄弟関係にあると見ている」(420頁)と述べ、旧約聖書外典シラ書1章11-12節を取り上げておられました。

「主を畏れることは、誉れと誇り、幸せと喜びの冠である。

主を畏れることは、心を楽しませ、喜びと、幸福と、長寿をもたらす」。

1125 「霊による感動こそ、説教の目的・目標である。福音は恍惚境ににまえひきずりこむ
ような喜びの使信である。宣教というものは、聴衆の恍惚境に至ることを意図する。
そこで隠されていたものが表面に表れ、神がすべてにおけるすべてになられることを
示すしるしとなる。このような霊による恍惚境においてこそ、最初は神のみまえにあって
楽しんでいただいていた知恵が（箴言8章30節以下参照）、共に遊びたわむれている。この
知恵は、完成の時に、はじめて正しくそのたわむれを始めるはずのものなのである」
1130 （同613頁）。

「わたしは説教を期待して待つ。説教を必要とするからである。あまりにもおとなに
なりすぎたために、そして愚かであるがために、あの遊び、神のお気に召す遊び、知
恵と幼な子らの遊びの中に引き入れられる必要があるのである。わたしは、ふるさと
へ帰る歌を歌いはじめ、失われた人々と共に喜ぶことを始める説教を待っている。わ
1135 たしに生きることを教えてくれる説教を待っているのである」（同29頁以下）。

21頁1行目

1140 ある人が、自分は情熱をこめて喜んで説教しているのだと言えば、せいぜいのところ、
それはこの人のしあわせな気質を示すのだと見なされるか、悪くすると、自分のして
いることに夢中になっている熱狂主義者だということにされてしまうであろう〔Sagt
nun einer, er predige leidenschaftlich gern, so mag man ihm im
besten Falle vorhalten, das sei sein glückliches Temperament, und
1145 im schlechtesten, er sei ein Schwärmer, der sich an seinem eigenen
Tun berausche.〕——このいずれの非難もそれなりに正当である。しかし、わたし
が自分を例にして説明しようと試みたことは、たとえこの〔わたしという〕実例そのも
のが疑問視されるにしても、正当な発言として承認していただきたいのである。詩篇
第一〇七篇二二節によれば、救われた者たちは喜びのうたをもってみわざを語り伝
1150 えるべきなのである。そして、説教は神について語るのだとすれば、それはやはり詩
篇の詩人が「あなたのほかにさいわいはない」（一六・二）と言い表した神について
語るのである。詩篇第一一九篇は、いましめがどれほどに楽しみなものかを語って

疲れることがない。「あなたのいましめはとこしえにわが嗣業です。それはわたしの心の喜びだからです」(一一一節)。

1155 エレミヤは、試練の中でみ言葉の喜びを思い起こす。「わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなりました。万軍の神、主よ、わたしがあなたのみ名をになうことは、わたしの心の喜びとなったのです」(エレミヤ書一五・一六)。明らかにエレミヤにとっては、**み言葉をうけるということは、喜びを受けることなのである！** 説教することにおける喜び、「情熱をこめて喜んで」ということは、
1160 説教者の**人格**の中に求められうるようなもの**ではない**。**喜びの言葉そのものである**み言葉それ自身の中に求めうるものなのである。それゆえにヨハネの伝えるキリストもご自分の語ることの**目標として喜び**を挙げられるのである。「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」(ヨハネ一五・一一)。**説教者が聖書に耳を傾けながら、キリストご自身を聞きとるとすれば、その時、彼は満ちあふれる喜びにはいるのである**。**喜びなき説教者は、おそらくまだ少しも聞いていなかったのである**。**喜びとは、聞くことに成功することである** [Der freudlose Prediger hat möglicherweise noch gar nicht gehört. Freude ist ein Hör-Erfolg...]。このことは、われわれが喜びに仕えるものだという理由によるだけではない。むしろ**われわれの仕事そのものが喜びの仕事であり、われわれが扱う言葉が喜びをもたらすものだからである**。**み言葉への奉仕が喜びをもたらす**。いかなる趣味の与える喜びも色あせる喜びをもたらすのである [Der Dienst am Wort bringt Freude, Freude, vor der alle Hobby-Freuden verblassen.]。

1175 22頁4行目

説教における喜びに不可欠なのは**冒険** [*Wagnis* 大胆な行為, 冒険, リスク] である。説教は、あえて試みられる企てである。その向こう見ずのところが、説教に慣れて、毒にも薬にもならないものにしてしまうということで覆われてしまうべきではないであろう [Eine Predigt ist ein gewagtes Unternehmen, dessen Tollkühnheit nicht durch Gewöhnung und Verharmlosung verdeckt werden sollte.]。われわれが説教するということを、聖なる遊びだと定義する時、
1180 今それに付け加えられなければならないことは、この遊びにわれわれは生命を賭け

るのだということである。自分の説教を、役人が書類を片づけるように事務的にやってのける時でさえもそうなのである。常に生死が問われているのである〔Immer geht es um Leben und Tod.〕。

9行目

アンリ・マチスが、自分の描くどの絵にも、自分は生命を賭した冒険をしてきたと言ったことがある。芸術家が誇張したがることを考慮したとしても、ここにひとりの人が、絵をかうことのために、いっさいを身に引き受け、いっさいを賭してきているのを否定することはできないであろう。説教者は更になおどれだけのものを投入しなければならないことか。ここでは、線とか、平面とか、色彩どころではない、**焼きつくす炎である神が問題となっている。この神の到来と現臨をわれわれは告げなければならない。**そうとすれば、火災が起こらないではすまないのである。われわれは火消しではなく、火つけ役であるべきである〔Nicht Feuerwehrleute, sondern Brandstifter...〕。花火職人ではなく、**炎を投ずるためにやって来た放火者**なのである〔Nicht Feuerwerker, sondern Feuerwerfer...〕。——われわれのつとめは危険である。なぜならば、ここで、この投げられた火に耐えられる誰があらうかと思うからである。——この冒険はもうひとつ別の局面を持っている。どのような説教においても、われわれは一種の急坂滑降〔Steilfahrt〕に取りかかるのである。その急坂〔Hang〕のかなり上方で、まだ完全に見通しがつかないところで、突然深淵〔Abgrund〕が口を開く。しかもこの急坂は、やわらかな土地ではなく、岩石の間を走っているのである。**説教する者は、その目的地は知っているものの、その途中では未知なるものの中に突っ込んでいくのである。**

23頁2行目

説教者の冒険に更に不可欠なものは、この場合にはいつでも**冒険を行なう者の条件が、満たされていないのだ**ということである。**滑降競技をする者〔Rennfahrer〕**は傾斜を知りつくし、どのように重心を傾けるべきかを知っている。なお最後の不確定要素を残すとしても、自分の事柄について確信を持ちうる。おそらく勝利は確信できぬまでも、**立派に滑ることができる**と確信しうる。**説教者は勝利を確信しているかもしれない。**しかし自分に立っている力があるかどうかは自信がないのである。絵を

かくこと、スキー、木を切ることにおいては、わたしは、自分が何をなしうるか、何をなし得ないかを知っている。自分が何を信頼することをゆるされているか、ゆるされていないかを知っている。説教する際にも、わたしは自分の限界をわきまえなければならない。ただし、それはほとんど役に立たない。なぜならば、はじめから限界を越えてしまっているからである。自分の限界の内部にあっては、わたしはただ神々について、神の思想について語りうるだけである。それらは、現実には、神を欠いているのである。説教する者は、いっきよにその限界を越える。自分に不可能なことをする。ゆるされない冒険をする。火を投げる。つまり、「神」—を語るのである。しかし、その場合には、自分に不可能なことをあえてするということが意味することは、その不可能ということの中で冒険を行なうことであり、その冒険をあえておかすことの中で、「可能」を知るということなのである。そうでなければ、説教論の教科書は無意味であり、説教学は異言についての講習をもって代えるべきことになる。しかしそれもまたおそらく不可能であろう。したがって説教論は、勇気を起こす書物、そこから喜びが生じてくるような正しい冒険への手びきでなければならないということになる。この冒険はしかし、盲目の冒険であるべきではない。あらかじめ、知識を得ておくことが必要なのである！

この冒険が成功すべきであり、挫折に至るべきでないならば、この知識を得ることが必要であろう。これまで、情熱をこめて喜んで説教することについて語ってきた。この「情熱をこめて喜んで」という言い方は、ひとつの逆説を示している。「情熱をこめて leidenschaftlich」「情熱 Leidenschaft」ということは、苦しむこと Leidenに関わりがあるからである。今までわれわれは、一方の面だけを見てきた。ここでもうひとつの面を見るのが適当であろう。

24頁4行目

エアハルト・ケストナー Erhart Kästner はこう述べている。「……情熱とは、友情、敵意、幼さと同じく、ひとつの状態である。苦しみの状況の中にある、それはひとつの宿命である。熱情 Passion と同じく、それはわたしがあゆむ苦しみの道を意味する。つまり情熱の中にあるとは、苦しむことである。情熱の中に、わたしはちょうど捕われの身になるごとく踏み込んでいく。それは苦しむことができるということである。この言葉は受動的である。しかしわれわれは行動至上のところがあるので、これをき

わめて能動的なものにしてしまった。だがそれは、**気違いじみたもの [Verrückte]**への転化でしかない↓のである」(『ひばりの学校』 Die Lerchenschule, 一九六四年、一八八ページ)。

情熱→苦しみ→受動⇒きわめて能動的なものに **気違いじみたものへの転化**

10行目

明らかにわたしも、**↑気違いじみたものへの転化**に踏みこんだのであろうが、「休みの日の労働」について語った時、それによって自分を修正するつもりではあったのである。今や「遊び」とか「冒険」とかという用語は、「苦しむ [leiden]」、「情熱 [Passion (情熱. (キリストの) 受難!!)]」という用語によって補われなければならない。これらのことは、「情熱をこめて喜ぶ」ということに**不可欠 [gehören]**のことであり、常にこれに伴い [Begleiter 同伴者]、あるいはその前後を走る [Vorläufer (先駆者; 先駆け) oder Nachläufer (? 盲従する人, 信奉者?)] のである。情熱をこめて喜んで説教する者は、情熱が単なる気質の事柄でない限り、苦しむことを覚悟するのである。**情熱がほんものであるかないかは**、この常に同伴してくれるものを**耐え忍ぶこと**によって証明されるであろう。

この常に同伴してくれるもの! つまり「苦しむ」、「情熱」/「受難!」を耐え忍ぶ!?

後ろから3行目

ここで支払わねばならない苦痛をあらかじめ見積るという試みは、このあらかじめ知識を得ておくという作業に不可欠のものである。それは厳密にまえもって計算することが可能だというのではない。そうでなければ、**この冒険は計算可能となり、冒険ではなくなってしまうであろう**。しかし状況によって**驚かされ、その中で硬直してしまわないためには、あらかじめ見積り**をすることもまた必要なのである。ここでは**生死をかけた遊びが問題になっているのだ**というわれわれの言い方も、苦しみについて語られぬ間は、空語でしかないことになろう [Schätzungen aber werden notwendig, damit uns der Zustand nicht überrascht und wir in ihm erstarren. Auch wäre unsere Rede, es gehe hier um ein Spiel auf Leben und Tod, nichts als eine Phrase, wenn das Leiden verschwiegen würde.]。

空語 Phrase 1. a《輕蔑的に》きまり文句, 月並みなく中身のない言葉. b. 成句, 慣用句, 熟語

25頁3行目

説教論というものは、われわれが言葉のとりこ[Gefangenschaft des Wortes]になりつつ、どのような態度をとるべきであるか、「苦しむことができるということ」は何を意味するのか、ということへの手びきをすべきである。なぜなら、そのようにしてこそ、説教論の語るべき第一点について十分なことがなされるのである。説教論は喜びへと手びきする。それはただ苦しむことがしりぞけられ[unterschlagen (隠蔽され?)]ないようにとなされる。「神が正しく高き賛美を受けるのは、世俗のことに病んでいる精神によるほかはないのである」(カタリーナーレギーナ・フォン・グライフェンベルク Catharina Regina von Greiffenberg)。

(Wikipedia より) カタリーナ・レジーナ・フォン・グライフェンベルク(また Linsmayr von Greiffenberg)、Freilin[男爵の女性形] または結婚後は Freifrau von Seyssenegg (1633 年 9 月 7 日 Seisenegg 城、Viehdorf bei Amstetten、Niederösterreich 州で生まれる。1694 年 4 月 10 日ニュルンベルク死去) プロテスタント神秘主義に根ざしたキリスト信仰の詩人。バロック時代で最も重要なオーストリアの詩人の一人に数えられる。



◎unterschlagen 1. 横領する. 2. 《話》(事実・情報などを)秘匿する, 隠蔽する, 握りつぶす, 公表しない.

Catharina Regina von Greiffenberg

9 行目

わたしは、自分がなした予備的考察の最初の諸命題を越えて更に前進するまえに、わたしがすでに始めてしまった告白について、なおひとつの意見を述べておきたい。わたしがどれほど情熱的に絵をかき、スキーを走らせ、木を切ろうと、これらすべてのことを、わたしは捨てることもできる。切ってもよいほどに伸びた木がなければ、切る必要はない。雪が降らなければ散歩に行けばよい。絵をかくことは次の夏休みまで

待ってもよい。正直に言ってこれらのことについて語るのは、いささかこれみよがしの
ことになりかねない。しかしいささか悲壮な言い方かもしれないが、**自分の趣味は捨て得ても、説教することをやめることはわたしにはできないことだと言いたい**。用心深
く言えばただこう言いたいのである。わたしは今ではもはや説教者としての任命を受け
て働いているわけではないが、説教することをこれまでやめたことはなかったのである。
しかしながら、**最初の説教者たちのひとりが、「もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわざいである」とわれわれに語る時（第一コリント九・一六）、彼はそのこ**
とを説教者たるわれわれに、すべての説教者にあてはまることとして予告したのである。そこで、わたしはここに予告されたことをもう一度自分の言葉で言い表わしてみ
ながら、説教論を書かなければならないのである。**こういう誇張がゆるされるとすれば、わたしのこの次にする説教の準備のためにひとつの説教論を書くのである**。もう
少し誇張をやわらげて言えば、わたしは説教することを学びたいし、学ばなければなら
ない。それゆえひとつの説教論を書きたいのである。説教を強いられることから、
説教論の必然性が生じるのである。

26頁4行目

「情熱をこめて喜んで」ということ、説教について喜び、また苦しむということに不可
欠なものは、ここでは**常に生徒であり、初心者であり続けるという意識**である。学び
つくしたなどというのは愚か者でしかない。そして常に初心に帰り続けることのない
者は、ただ虚栄に生きる者でしかない。**み言葉は常に新しく聞かれ、新しく語られな
ければならない**。あらゆる説教の状況が、そのたびに新しくわたしをして、**生死を問う
冒険にのぞましめる**のである。それ故に、説教するということは、**説教のたびに新しく
始める**という恩恵を与えてくれるのである。このような**恩恵を把握する**ということ、**生
徒であり続けること、これに思いをいたすこと、それが説教論を構想する**ということ
であり、**研究する**ということなのである！

さてしかしわたしはこの書物を、ただ単に説教者としてばかりでなく、**説教の聞き手
としても**書いている。ここでどうしても更に告白しないわけにはいかない。自分は**情
熱をこめて喜んで説教する**ということを語りうるとしても、わたしは——これでも十分
遠慮深く言っているのであるが——ひと息に、わたしは**情熱をこめて喜んで説教を**

聞くと言いにくいのである。ここでわたしの心を妨げる**二重の悩み**があるからである。

第一に、われわれが聞くよりもむしろ語りたがるということは、人間の虚栄心と愚かさにと当然つきまとうことである。そうでなければヤコブの手紙の知恵の言葉は不必要なことになる。「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである」(ヤコブ一・一九)。この言葉を、**神のみ言葉を聞き、また教えることとの関連で解釈しようとした**注解者たちがあった。彼らはその語義の把握において誤っていたとしても、その誤りが示しているのは、彼らが、明らかに**説教者の危険を深く見ぬいていた**ということだと言えよう。——だがこの知恵の言葉が、一般的な知恵を言い表わしているとしても、説教者というのは、**誰にもあてはまる勧告を自分の説教については無用とするほどに超人ではないのである！人間は、早く聞くことと遅く語ることに**
いての警告を必要としている。説教者としてもそのようなのである。

虚栄と愚かさに生きる者は、**聞くよりもむしろ語ろうとする**。このような事情は、**神のごとくありたいという原罪**を明らかに示しているということもあり得よう。神が言葉であられたがゆえに、わたしは**自分が言葉でありたいと願う**。ちょうど牧師も礼拝において最初の、また最後の発言権を持っているように、最初の、また最後の言葉を語り
たいと思う。神のごとくありたいと思う。人間であろうとし、聞こうとするよりも、**言葉そのものであろうとするのである！**ここにわれわれが受けることにとどまるよりも、むしろ自分から働きかけ続けているということの究極的理由があるのである。

われわれは更に、聞くことの、**説教を聞くことの困難さを軽視してもいる**。まるで説教を聞くことの方が説教することよりも容易で、危険も少ないかのごとくである！聞くということは冒険ではなく、焼きつくす炎である神と関われるのは語り手だけのようである。聞くことも直滑降であり、聞き手もまたその傾斜を知らず、隠された深淵に気づかないのである。ここでもわれわれは、**転び、ひっくり返り、脊椎をいためることがありうる。**

聞くことが、説教することと同じように冒険であるならば、聞くというその冒険も、これこそ、「情熱をこめて喜んでする」ということにならなければならないし、われわれ

が説教を聞き得た時には、それはすばらしい、祝福を開示するものでなければなら
ないのである。説教への道程は、快活さへの道、喜びへ至る道でなければならない。
そして、説教が行なわれる道程も、喜びへ、快活さへ、開示された祝福への道程であ
る。

しかし——これが沈黙しておくわけにはいかないもうひとつの悩みであるが——わ
たしが説教において聞きとるものは、概して喜ばしさをもたらさない。説教〔の中〕に
おけるほど〔、〕言葉が多くて、しかも自分には無関係に語りすごされてしまうことは
まれである

[Selten wird so wortreich an mir vorbeigeredet wie in Predigten.直
訳：説教の中でのように、わたしに対して言葉数多く、説教の中でのように言葉が通
り過ぎていくことはまれである]。

憂愁の気分 [Schwermut (1.憂鬱, 沈鬱, 憂愁. 2.抑鬱) s-schwaden (直訳：
(地面・抗などから立ちのぼる) 蒸気, ガス, もや)] や、キリスト教と結びつけられた、
あらゆる種類の時代分析、この世の知恵(ああそれが本当に知恵でさえあってくれ
たらと思う!)、わたしはまことにしばしば、説教壇から霧のようなものが立ちのぼるの
を見る。それは、むしろ霧が晴れることこそ必要な時に、日光をさえぎり、会衆の上に
広がるのである。そのような言葉の流れにあっては、わたしは眠ることもできないま
まであり、むしろ、退屈な話の時には目を開いたまま眠るという噂のある、かの才能
豊かな教会指導者を羨しくさえ思うのである。(8)

もちろんわたしは、この説教学的に言えば霧に閉された国にも、光のあたっている場
所のあることを知っている。太陽の島があるのである。ひとりの解釈者がテキストを
説き明かしてくれる。そしてそのテキストが、われわれにとっても今日いきいきとした
ものになってくる。テキストそのものが語るのである。一度は、ひとりの村の牧師であ
った。もう一度は世界的に有名な組織神学者であった。彼は聖書の教えを展開した。
そしてわれわれは天国にひき入れられたのである。それゆえにルターも、たとえばス
テパノの見た幻を、説教の出来事と関連させることができたのである(ヴァイマール

版全集第四六巻、七一二ページ)！ 教会が教えるという日常的な出来事において、
1395 天が開かれる。「神はここにおられる！」そこに天国が開かれる！そこに、あの愛そ
のものである火が燃えるのである！ 気の利かぬ聴衆の一人が礼拝の終わった時に、
「うるわしい」説教を聞いたと語ったとしても、それを、説教者がうるわしく聞こえるよ
うに話して聞かせただけであること、その聞き手に正しい判断が欠けていることのし
るしであることを見なす必要はない。そのことが、ここに天国への門が開かれたことを指
1400 し示すことがありうる。新しい歌がうたわれるべく、またそのことのゆえに神学固有の
美しさ *pulchritudo* が生まれてくるはずのものの、その輝きのいくぶんかでもさし
込んできたことを示すしるしであることがありうるのである。そういう場合、どうして、
「うるわしい説教 *schöne Predigt*」に、つまり、聴衆を賛美にひきこむような説教
にならないであろうか。教えの中で天国が開示される時、賛美以外の何があり得よ
うか。どうして喜んで聞くということがあってはならないのか！ マルコが、宮において
1405 教えられるイエスについて「大ぜいの群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた」(マ
ルコ 一・三七)と語ったことの、いささかの痕跡でもくり返されることはあり得ない
のであろうか。その時、受難もまた遠くはなかったのである。説教者の苦しみ、「説教」
という彼の受難は最初は隠されたままのものである。説教の真実の美しさは、断食
をして、その顔に油をぬっている者〔マタイ六・一六―一八〕の顔に似ている。苦し
1410 みの中から説教は輝きを得る。「内側からの大いなる輝き」〔リルケ〕を得るのである。
雄弁の放つ輝きに反論するものではない。ただ、説教がいつわりの輝きを見せてい
るのではないとすれば、その説教の美しさは、雄弁のそれとは異質のものなのであ
る。

1415
能弁の説教者を聞く時、わたしはよく、まことに大きな悲哀に捕らえられた。——その
一方、わたしは、アルバート・シェーデリン *Albert Schädelin* の指導した説教学
演習における、ひとりの教師試験準備中の学生の説教を決して忘れないであろう。
その男はつかえつかえ語った。中途半端であった。形式的には全く不十分であった。
1420 しかしそこには光があった。光があったのである。人々は、この男がテキストを完全に
は理解していないことがわかった。そして、彼の、自分は説教をすることができないと
いう思いが、テキストをして語らしめることになったのである。このような説教者は確

かに聞きやすいものではないが、わたしはこのような説教者をこそ喜んで聞くであらう。それにもかかわらず、聞く者の願いを語るものとして、このわたしの説教論を彼の机上に贈りたいのであるが、この説教論は、聞く意志ある者に、聞くことを容易にしてあげることによって、このような説教者の助けともなることであらう。

否定的な、そしてまさしく積極的な聞き手としての体験から、説教への期待をこめて、わたしはこの書物を書きたいのである。

わたしは説教を期待して待つ。説教を必要とするからである。あまりにもおとなになりすぎたために、そして愚かであるがために、あの遊び、神のお気に召す遊び、知恵と幼な子らの遊びの中に引き入れられる必要があるのである。わたしは、ふるさとへ帰る歌を歌いはじめ、失われた人々と共に喜ぶことを始める説教を待っている。わたしに生きることを教えてくれる説教を待っているのである。

マルティン・フィッシャー Martin Fischer はこういう記事を書いている。「講義であったか、礼拝のときであったか、ユリウス・シュニーヴィント Julius Schniewind が、嘆き、立腹し、呪うほどにしながらこう物語ったのは、もっとも印象深い経験のひとつであった。彼は、ハレにおいて、自分に、神無き者、失われた者の義認を説いてくれる説教者を探し歩いて、ついにそれを見出さなかった。自分にそのことを説きうる者は誰ひとりないのか、シュニーヴィントは、自分の心を脅かすものが何かを、牧師たちは全く理解しないような印象を受けた。牧師たちは、自分自身や、シュニーヴィントのような人の祝福について不安な思いになることなど全くないように思われたのである」(『諸考察』Überlegungen 一九六三年、二三ページ以下)。

われわれの説教がたくさんの霧や雲を作るばかりで、明るさや光を広げることのほとんどないのは、多くの説教者が、シュニーヴィントの不安を故意に見すごしていることに関連があるかも知れない。おそらく彼らは、われわれが、そうした不安を克服した時代に生きているように思っているからである。これに対して、やはり問わなければならないのは、教会や世界の中に憂鬱な思いが忍びこんでいるのは、われわれが

シュニーヴィントの不安を抑圧してしまっているところからくるのではないかということである。確かにわれわれは今日他の不安も知っている。しかし、それはいかなるものなのか！それらはすべて、神から遠ざかっており、しかもその神からのへだたりを持ちこたえられなくなっている者の根本的不安に根ざしているのではないか。しばらく、このような推測に踏みとどまることにしよう。もう少し厳密に言えばこう言える。わたしがこの書物を書くのは、罪のゆるしについて講義してみても、何らかの決断を求めて叫んでみても、それはわたしの助けにはならず、わたしを助けるのは、ただ判決そのものだからである。つまり判決がその名によって述べられる時、その方が、そこに現におられるような判決がわたしを助けるのである。わたしは、それ自体が奇跡であるような説教を期待する。説教が奇跡であるのは、そこで語られている方ご自身が、語られているそのことの中にはいってこられ、ご自身で発言され、ただ単に神とその解放の言葉について語られるのみならず、そのみ言葉がここに出来事となり、解放の言葉が実際に解放をもたらすようになるからである。

おそらく更にこういうこともゆるされよう。わたしは、そこで語り手自身が自分をそこに賭けることによって奇跡となるような説教を期待している。宗教上のお役人が、日曜日に講話をしてくれるようなことでは、眠らせないまでも、あくびをさそうであろう。わたしが期待するのは、そこである人が、ひとのいのちを救うために自分のいのちを賭けるような説教なのである。たいていの説教者は、あまりにも深く勇気を失っているので言葉に富んでいるのである。そして彼らが勇気を失っているのは、聞いたことがないままに語っているからである。それゆえにわたしは、説教者にとっても、聴衆にとっても、奇跡であるし、奇跡となるような説教を待ち続ける(第三章第Ⅱ節及び第一九章参照)。その時、講壇に立つ人においても、その聴衆においても、ネリー・ザックスが、イスラエルについて歌ったことが成就する。「イスラエルよ、あこがれの頂点に立つ者よ、あなたの頭上には、奇跡が雷雨の如く注ぐ。あなたの時代の苦悩の山なみの中に降りそそぐ雨である」。――まさしくそのようなことが起こるために、わたしもまたこの書物を書こうとしているのではないか。

そのとおりである。まさしくそのことを、これまで語ってきたのである。そしてそうなるべきなのである。説教者はすでに先立って語られたことに仕えるべきである。奇跡に

赴くべきである。雷雨のごとく奇跡は降り注ぐべきである。そしてわたしの書物は、学生たちへの呼びかけ以上のものであろうとはしていない。斜面の上であって、走り出そうとして不安になっている学生、道なかばにあって、何らかの意味で疲れ果て、道を失ってしまっているような人に対する呼びかけである。奇跡に向かう途上での呼びかけである。これは必要なのである。なぜならば、奇跡は、自明なるものの反対だからである。奇跡は世界を変革する。創造の世界を変える。個人を変革し、社会を変革する。奇跡において変革が起こる。奇跡は、現在あるものの革命をもたらす。奇跡は、ものをひっくりかえしてしまう。奇跡においては何かが起こる。しかし、この奇跡を奇跡たらしめる出来事は神のなさることであり、計算不能であり、驚異の思いを呼びさします。これを計画することはできないのである。

説教の計画をつくることはできる。しかし、約束された奇跡までも計画することはできない。それゆえに、情熱、喜び、冒険、遊び、苦しみについてわれわれが述べてきたすべてのことは奇跡に属するであろうし、これを呼び起こすことはできないのである。それゆえにわれわれは数多く説教しながら、ほとんど奇跡を知らないのである。説教ならざる説教の数を重ね、その上に何らの奇跡も重ねられることのないままに、多くの人々が、説教をしているのである。

そうすると、ひとつの説教論が奇跡行為の手びきにならなければならないのか。それがわれわれの考察の論理的帰結のように思われる。説教は奇跡である時に説教なのである。説教論は、説教が、奇跡そのものにほかならぬ説教になるようにと手びきをするのである。それゆえに奇跡行為への手びきなのである！——こうした論議において、いつも考慮されないままになっていることは、われわれは説教しながら、自分には不可能なことをやっているのだということである。せいぜいのところ説教論は奇跡への勇気を作り出し、奇跡を期待する手びきを与えるだけである。「どうか、あなたが天を裂いて下られるように」(イザヤ書六四・一)。このことがすでに示唆していることは、説教論は、み言葉に仕える者を雄弁の王者にする魔法の書物ではないということである！

「奇跡」という用語にここで追隨して現われるのは「待つ」という用語である。奇跡に

1515 にとって待つということは不可欠であり、奇跡は期待されることを欲するのであるとすれば、ここでは待つこと自体がすでにいささかでも奇跡に属することになる。説教が始まるまえに、多くの家々から、待つ人々がひとつの家にやってくる。説教者がその説教を準備し、学生が勉学を始めるに先立って、語りかけを待つ群れがある。わたしがこれまでしばしばいぶかしがったことは、按手礼や牧師就任式に際して、合唱、音楽、花、挨拶など、どれほどの無駄なことがなされてきたであろうかということである。それは栄光あふれる仕事始めの方法ではある。だがそれはしばしばそののち起こる
1520 ことにいささか適合しないのである。しかし、いずれにせよ、それも、み言葉に対する教会の期待、あこがれの心のしるしではあり得よう。説教とは期待された行為なのである。そして説教のつとめに備える者は、自分が期待されているということを、切に待たれているということを、承知すべきなのである。

1525 説教者の所産は期待されているのであり、その一方、詩人の所産は待たれてはいなかったところで市場に投げだされるものであるという点で、説教者は詩人と区別することができよう。この点については、クルト・マルティの次の文章を参照のこと。「説教はどのように作られるのか、詩はどのように作られるのか」、トゥルナイゼン記念論文集『言葉と教会』一九六八年、一八三ページ以下。現在では、ドロテー・ゼレ他編集の『文学と神学年報三』一九六九年、九四ページ以下にも収められている。Kurt Marti, Wie entsteht eine Predigt? Wie entsteht ein Gedicht?, in: Wort und Gemeinde. Festschrift Eduard Thurneysen, 1968, 183ff. Jetzt auch in : Almanach 3 für Literatur und Theologie, Hg. v. Dorothee Sölle u. a., 1969, 94ff.

1535 もとより、動かされることなく、頑固で、疲れ切った教会もある。しかし、そういう教会は待つてはいないのだとあまりに早急に思いこむべきではない！ さまざまな神学的傾向を持った若者たちが、この点では意見を一致させているのである。

1540 パウル・アルトハウス Paul Althaus は、「教会の説教についての疲れというものが、それ自身として存在すること」を否定する。「教会はむしろ新しい舌により、新しい霊の力による説教を待っているのである。われわれの説教には倦み疲れたかもし

れない。しかし、説教そのものにではないのである」(『福音主義的礼拝の本質』
Das Wesen des evangelischen Gottesdienstes, 一九二六年、一八ページ)。
1545 オットー・ヘンドラー Otto Haendler は、この発言は今日もなおあたっていると
言っている。(『説教』Die Predigt, 一九六〇年〈第三版〉六ページ)。マンフレート・
メッツガー Manfred Mezger は「説教の聴衆が、説教に〈何ものか〉を期待して
いること、まことに多くのこと、本来的にはすべてを期待しているということ」に驚いて
いる(「説教の権能としての歴史的真理」『福音主義的神学』第二二号、Die
1550 Gechichiche Wahrheit als Vollmacht der Predigt, EvTh 22, 一九六二
年、四七八ページ)。——この関連で、相互には少しも似ていない**三つの現象**に言
及しておきたい。最近の学生紛争において、礼拝もまた明瞭な**抗議を呼び起こす**き
っかけとなったが、この行動もまた**ひとつの期待の表現**を示すと言えないであろうか。
——**礼拝に出席する者の数が減少していることから説教の終末を予言する預言者**
1555 **たち**に対しては、**ビリー・グレアム**〔現在、日本では一般的にビリー・グラハム Billy
Graham〕の**数的な意味での成功**を挙げることができよう。これも**潜在的な聴衆の**
期待がなければ、不可能なことであろう。——カトリック神学の聖書的説教への転
向は、聴衆の期待という表現で総括することはできないかもしれない。しかし、**カトリ**
ック神学の説教へ向かう驚くべき如とした展開は、聴衆なしには不可能であろう! カ
1560 トリックのキリスト者たちが説教に期待していることを表わすものとしては次のものを
参照のこと。『聴衆と説教、ひとつの会議報告』オットー・ヴェーナー、ミヒャエル・
フリッケル共編、一九六〇年。Hörer und Predigt. Ein Tagungsbericht, Hg.
Otto Wehner u. Michael Frickel, 1960. エリザベート・プリュンネケ「対決を
迫られる説教」ギュンター・ビーマー『説教のわからぬ言葉』一九七〇年、六三ペー
1565 ジ。Elisabeth Plincke, Predigen in Konfrontation, in : Günter
Biemer, Die Fremdsprache der Predigt, 1970, 63.

われわれを**ひとつの期待が迎えてくれる**ということ、説教者としてのわれわれは、決
して勝手気ままなことをやって趣味を楽しんでいる者ではないということに、**驚きの**
1570 **心を抱く**ということから、説教作業を始めるならば、それだけですでに多くのことを得
たことになるろう。日曜日の労働者、と言われる。そのとおりである。だがその奉仕を待
っていてもらえる日曜日の労働者である。自分の奉仕のつとめを、これが欲せられ、

望まれているつとめなのだということについての驚嘆から始めるならば、このつとめはまた、感謝を伴う驚嘆の思いのうちに果たされるであろう！

1575

さてしかし、多くのプロテスタント教徒は、説教を聞くことを怠けるストライキをすることによって、自分たちが講壇上の男からも女からも、何も期待していないことを、全く何も期待していないことを示威している。この現象がこの点で見せかけのことなのかどうか、わたしには確信がない。だが究極のところで確かなことがある。被造物が切なる思いで神の子たちの栄光が明らかになることを待ち望んでいるということが真実であるとすれば(ローマ八・一九)、幻滅を味わっている者も満ち足りている者も、成熟している者も未熟な者も、説教者と聴衆それ自身が奇跡となることを待っているのである。それと知ることのないままに、彼らは説教が説教となることを期待しているのである。この意味では、この世のあらゆる耳は、沈黙が打ち破られて喜びになることを待っているのである。教会には入ってこない者でも、ひそかにその耳を教会の壁につけて、語ることも聞くことも奇跡であることを証示する言葉があるのかどうかうかがうのである。教会の期待ともろもろの民の期待との間にある相違は、教会は自分が待っているのは誰であり、何であるのか、よく承知しており、承知しているべきだということと、他の被造物はそれを知らない、まだ知らないか、もはや知らなくなっているということとでしかないのである。死者でさえも、自分たちをいのちへと呼び入れる言葉を待っているのではなかろうか。

1580

1585

1590

1595

1600

しかも、説教者の方がについて語っているその方ご自身が、まず第一に、説教することと聞くこととを待っておられるのである。神が待っていてくださるということの中に向かって、われわれは説教の準備をする。神の期待の中へと、われわれは語りこむ。説教をする。説教を聞くのである。われわれの説教は、神ご自身によって期待されていた語りかけなのである。

この点に、説教せざるを得ない究極の理由がある。説教が受け身のもの Leidenschaft [情熱の意味を持つこの語に両意を持たせている] であるということ、ここに神の派遣の行為が行なわれているということ、救い主の呼びかけがなされているの

だということが、ここに含まれている。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として……」(マタイ二八・一九)。「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい……」(マタイ一・二八)。いずれの場合も、派遣においても、呼びかけにおいても、待っておられる方が語っておられる。それゆえに、われわれの説教は、**二重の観点において受け身の苦しみ** Leiden-schaft である。——結局のところやはりここで受ける苦しみは、**説教者にとって自分が語りこむべき期待の地平線が、くり返し暗く見えなくなってしまう、自分がどこでもどんなに期待されているか、ということがわからなくなり、何よりも、ごく身近に自分を待っていてくださる方を見失ってしまうことなのである。われわれは、見えるところによらず信仰によって生きているのであるから、この見えないという苦しみなしに、説教において「情熱をこめて喜んでいる」ということはないのである。しかし、われわれが説教しているそのお方は、今来りつつある方であり、そのような方としてわれわれの説教を待っていてくださるがゆえに、喜びへの出口を開かぬ苦しみは、ここには存在しないのである。**

説教者の困惑と、聴衆の不愉快さの共通分母であるのは言葉の喪失の状況であると言えよう。説教者の状況の特質は、説教者が、神についても、世界についても、教会についても、自分自身についても困惑してしまっているということにある。